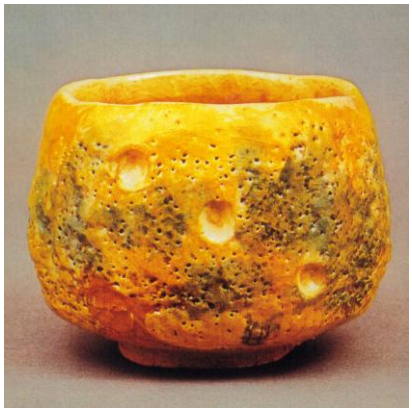
おもしろ！ 霊 界 物 語 －2



霊界物語は大変難しい教え（読み物）ですが、一面滑稽諧謔な駄洒落の多い、大声で笑ったり、クスクスと笑いながら読んで行けます。そして世の中の様々な面を教えてくれます。この表題を「おもしろ！霊界物語」としたのは清少納言の枕草子に「いとおかし（とっても趣きがある）」とあるように、教えの多様性を〝おもしろ〟とししたものです。

新屋三右衛門

目　　次

２－１、救 い の 船（霊界物語に登場する船）　・・・・２
３巻. . . ２　５巻・・・３　６巻・・・４
７巻・・・４　８巻・・・５　９巻・・・６
１１巻・・・10　１２巻・・・11

２－２、因縁、性来について　・・・１５
霊の因縁性来とは　・・・１９

２－３、素盞嗚尊のお働き（古事記の意味するところ）　・・・２１

２－４、親子、夫婦、師弟の関係　・・・２５

２－５、掃 除 の 仕 方　・・・２７
掃除の基本（飯の灰）　・・・２７
洗　濯（洗濯使）　・・・２８
掃き掃除（放棄）　・・・２９

２－６、薬用、秋の七草　・・・３１

注：《 》内の文章は筆者が入れたもの。
【 】内：数字は 巻/章　章題

救 い の 船（霊界物語に登場する船）

霊界物語には多くの船が出て来ます。船というと私などすぐに二代様の色紙や短冊に描かれた「救いの船」を連想しますが、救いの船であると同時に「教えの船」でもあるように思います。聖師は霊界物語の御口述に際し、台（ベッドのような物）の上に布団を敷き横になって口述されました。その際、その台を船と表現されています。

物語ではしばしば船は暴風に遭い宣伝歌によって風は収まり死ぬ覚悟をした人々は神の試練に会い救われ、神の実在を悟り、教えの偉大さを知ります。また、多くの未熟であった信者が船に乗り合わせた宣伝使や神の化身(多くは木花姫命)によって、後に教育され立派な宣伝使になります。そして、当然のように船は神司それぞれの使命と思いを乗せ目的地に向かいます。

また、一度船に乗れば命を船頭に預けるように、信仰（神）という船に乗れば吾こそはと言った我を出さず、自分は足らぬ者として一切を神に預けることを意味しているようにも思われます。物語では宣伝使としての船出であり、船中で宣教の切っ掛けをつかみます。そして、その時代の情報収集の手段でもあったようです。

そこで例のごとく霊界物語を巻ごとに順を追って出てくる船を見て行きましょう。物語で最初に「船」が出てくるのは第１巻の天の鳥（磐）船（飛行船？）、目無堅間の船【一輪の秘密】、シオン山の顕国の御玉を乗せた御船【黄金水の精】。第２巻第１１章「狸の土舟」に出てくる船遊びの船。スペリオル湖を行く船【湖上の木乃伊】ですが、主題に沿った船は第３巻からになります。なお本稿は３～１２巻までをまとめました。１３巻以降は後日に譲ります。

《注》　◇船名　　船の出発地 →　(経由地) → 到着地

(登)　：物語中の登場人(神)物

〔 〕：物語本文（ゴシック体）　　【巻 / 章　章題】

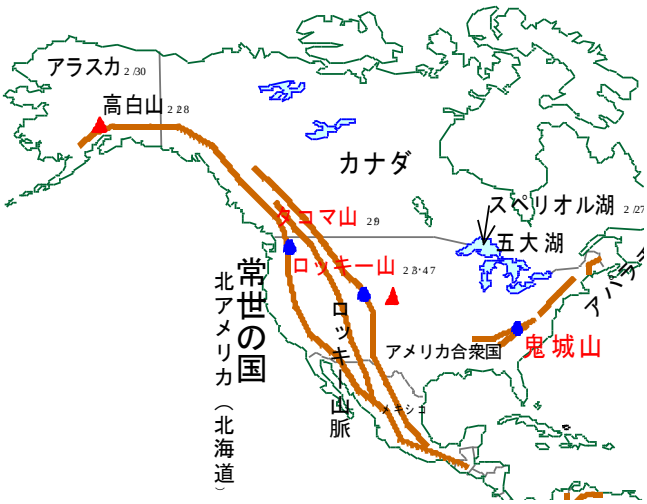
◆第３巻

第３９章　乗合舟

◇船名不明　　不明（スペリオル湖北岸）→ ロッキー山方面

(登)道彦・八島姫・玉純彦・白狐旭

＊高白山を出た道彦（大道別、後の日の出神）は諸方を遍歴し常世国スペリオル湖の北岸に出る、船を雇いロッキー山に向かう。その船には多くの船客とともに八島姫も乗っている。八島姫を探しに来た南高山の従臣玉純彦は八島姫を見つけ声をかけるが、国直姫命の使命を帯びた八島姫は自分は旭姫だといってしらを切る。船が岸に着くと玉純彦は城に連れ帰ろうとして八島姫の手を離さない、進退きわまり、国治立命の神霊にむかって、この場を無事にのがれることを祈願す



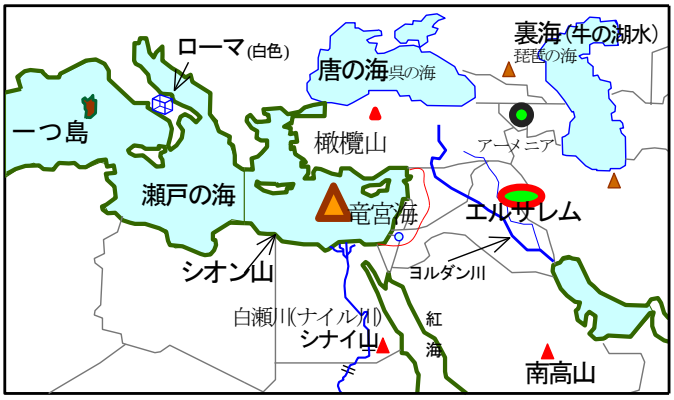
ると白煙が立ち登り姫は無事逃れる。あとに白狐旭の変化である八島姫と玉純彦は南高山(アラビア半島)に向かう。

◆第５巻

第３０章

◇船名不明　　瀬戸の海（地中海）→ 一つ島方面

（登）祝部神（はふりべのかみ）・高杉彦・杉高・牛雲別、船客



＊〔地中海の渡船場に、息急き切つて現はれた宣伝使があつた。今や船は静かな風に真帆を打揚げ、西南に向つて出帆せむとする時である。〕

祝部神は地中海の渡船場に着き、あわてて船に乗る。この紫の被面布を被った宣伝使は、教示を記した太い竹を左肩より斜交に背負ひながら紫の紐で乳房のあたりに確かりと結んでいる。船客はウラル彦の宣伝歌を歌うが、疲れて静かになったところで祝部神は　【5/30　真帆片帆】

〔高い山から一谷底見れば　憂しや奈落の泥の海　三千世界一度に開く梅の花　開いて散りて実を結ぶ
月日と土の恩を知れ　この世を救ふ生神は　天教山に現はれる　この世を教ふる生神は
地教の山にあらはれた　朝日は照るとも曇るとも　月は盈つとも虧くるとも　たとへ大地は沈むとも
誠の力は世を救ふ　誠の力は世を救ふ〕　と歌う。

ウラル彦の宣伝使、牛雲別は二樽の酒を船客に振る舞い祝部神に対抗する。【5/31　万波洋々】

＊祝部神の歌う「三千世界云々」の歌に神人らはなぜか、頭を鉄槌で打ち砕かれ、胸は引き裂かるれるような苦痛に襲はれる。そこに暴風雨が起こり、船は木の葉のように波に翻弄される。そこへ〔忽ち前方に当つて一道の光明が赫灼と放射するのを見た。これは高杉別の従者杉高の瑠璃光の玉の光であつた。〕そして、難破しかけた船は祝部神の宣伝歌によってサルジニア島（一つ島）に救われる。【5/32　波瀾重畳】

＊〔『三千世界云々』の歌を謡ふ声を蛇蝎のごとく忌み嫌ひし神人も、ここに本守護神の霊威発動して、天女の音楽とも聞え、慈母の愛の声とも響いた。神人らは一斉に声を揃へて、祝部神の後をつけ、『三千世界一度に開く梅の花云々』と唱へ出した。〕

〔天教山の爆発に際し、天空より光を放つて十一個の美はしき光輝を発せる宝玉、この瀬戸の海に落下し、あまたの海神は海底深くこれを探り求めて杉高に奉り、今やこの一つ島には十二個の宝玉が揃うたのである。かかる不思議の現象は、全く杉高がこの孤島に苦節を守り、天地の神命を遵守し、雨の朝、雪の夕にも目を離さず、心を弛めず、厳格に保護せしその誠敬の心に、国祖大神は感じ給ひて、ここに十一個の玉を下し、都合十二個の宝玉を揃へさせ、もつて高杉別および杉高の至誠を憫れませ給うたからである。これより杉高は高杉別と共に、この玉を捧持して天地改造の大神業に奉仕し、芳名を万代に伝へた。』とあり、『この十二個の宝玉は、天の磐船に乗せ、玉若彦の神司をしてこれを守らしめ、地教山の高照姫命の御許に送り届けられた。〕【5/33　暗夜の光明】

※「飲めよ騒げよ一寸先や闇よ・・・」と言うウラル彦の歌にあるように、酒によって人々を籠絡しようというとする牛雲別は、野立彦、野立姫の『三千世界一度に開く梅の花・・・』の歌を聴き頭を鉄槌で打ち砕かれたように苦しむ。そこに暴風が起こり船は遭難しそうになるが、祝部神の宣伝歌によって人々は救われる。〔ここに牛雲別は、危機一髪の神の試練に逢ひ、翻然としてその非を悟り、断然酒を廃し、かつ三千世界の宣伝歌を親のごとくに欣仰し、寸時も口を絶たなかつた。牛雲別は祝部神に帰順し、祝彦と名を賜はり〕　宣伝使となる。

◆第６巻

第９章　埠頭の名残

◇朝日丸　　出発地　常世の国（不明）→ 吾妻の国　　（登）弘子彦・春日姫・鷹住別

＊〔このとき船守は大声に、『オーイ、オーイ、今船が出るぞ。早く乗らぬと乗り後れるぞ。吾妻の国への船出ぢや』と呼はる。　この声聞くより男女二人は、何時まで話すも限りなし、名残はつきじと、われとわが心を励まし、スツクと立ち上り、春日姫は埠頭へ、弘子彦は西方指して姿を没しける。二人の宣伝使は互に見返り振かへり、尽きぬ涙の一時雨、憫れなりける次第なり。〕

月照彦、足真彦、春姫らは共に鬼城山の美山彦を言向和す。ナイアガラの滝から一人東北に進み東岸に着いた春日姫と常世の国に船で今到着した弘子彦は対面する。鷹住別は同じ船に眠っていた。【6/9　埠頭の名残】

第１０章　四鳥の別れ

◇春日丸　　不明（常世の国）→ 吾妻の国　　（登）春日姫・鷹住別

＊〔春日姫は急がしげに船に近づきぬ。船の名は偶然にも春日丸と云へるなりける。春日姫は船の舳先に立ち上り、常世の国の見納めと、振り向く刹那に顔と顔、思ひきや鷹住別の宣伝使、船を眺めて思案に暮るるもののごとくなり。春日姫は、ハツと驚き乍らよくよく視れば装こそ変れ、色こそ日に焼けたれ、擬ふ方なき吾夫なりける。〕

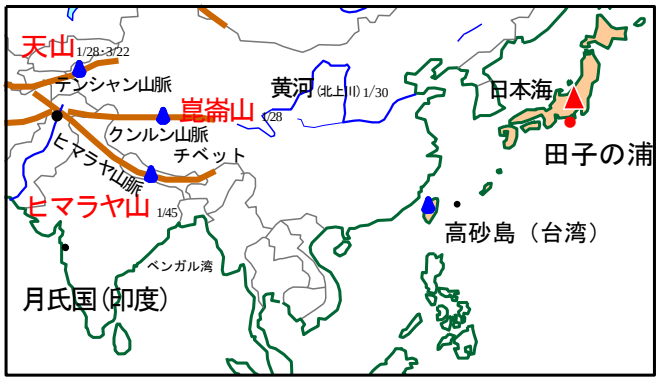
春日姫は船の舳先に立ち、常世の国の見納めと振り向く刹那に顔と顔が会う、それは鷹住別の宣伝使であった。船を眺めて思案に暮る鷹住別とのほんの一瞬の再会である。【6/10　四鳥の別れ】

※春姫は弘子彦と別れ、東岸から一人吾妻の国へ船出するが常世の国の見納めと岸に向かって振り向く。その一刹那、岸に立つ夫の鷹住別と顔と顔が合う。宣伝使は一人旅という厳然たる不文律が存在する。夫を思う春日姫の思いが神に通じ一瞬の再会が許される。神の御仁慈であろうか。

◆第７巻

第９章　　弱腰男

◇常世丸　　田子の浦 → 常世国（北米）　　（登）日の出神



＊〔日の出神はそれより天教山に登り、青木ケ原の木の花姫宮に致りて今までの神教宣伝の経過を詳細に物語りしが、木の花姫は深く感賞し、再び常世国に出発を命じたまひける。日の出神は撞（つき）の御柱の神および天の御柱の神に謁し、種々の神勅を蒙（こう）り、欣然として再び宣伝の途に就きにける。

田子の浦より今や常世国に向つて出帆せむとする常世丸の船客となりぬ。船中には数多の人々、あるひは唐国へ、あるひは常世国へ通ふべく満乗しゐたり。波は静かに風凪ぎわたる海原を西へ西へと進み行く。静けき海に漂ふこと数十日、遂に青雲山のある月氏国（インド）の浜辺に到着し、此処に一同は上陸して船路の疲れを休めける。この船は風の吹き廻しの都合により一ケ月ばかりこの港に碇泊するの止むを得ざるに立ちいたりぬ。日の出神は無聊（むりょう）に苦しみ山深く分け入りて此地に宣伝を試みける〕【7/9　弱腰男】

※日の出神は天教山の木花姫命の命により、田子の浦から常世の国へと出発する。西へ西へと進み、数十日を経て月氏国（インド）に着く。船は風の吹き廻しの都合により一ケ月ばかりこの港に碇泊する。ここから日の出神は日本を離れ印度の白雪郷にゆき、さらに筑紫島、高砂島へと守護職を任命する長旅が始まる。

第４８章　　悲喜交々　〔三四八〕

◇小波丸　　筑紫の嶋 → 黄金山　　(登)北光神、祝姫、蚊取別、

＊〔月照り渡る浪の上を客人を満載したる小波丸は、このローマンスを乗せて波に鼓を打たせつつ、東南に向つて進み行く。祝姫の歌に答ふべく以前の宣伝使は、亦もや立つて声も涼しく歌ひ始めたり。〕

祝姫は何よりも嫌な蚊取別に恋慕され、逃げ隠れつつある矢先、執念深くも蚊取別がこの船に乗っており、いやな歌を聞いて胸苦しく〔嘔吐を催す様な思ひに悩んでいたが、力と思う北光の神は、『蚊取別の燃え立つ思ひを叶へてやれ、それが宣伝使の世を救ふ役だ。幸ひ独身だから』と勧められ倒れん許りに驚く。しかし、決心を固め歌をもって承諾する。〕【7/48　悲喜交々】

＊〔途中で広道別の宣伝使が乗っている船（亜弗利加の熊襲の国へ向かう）と行き交う〕【7/49　乗り直せ】

＊〔如何した機みか竜宮城の海面に指しかかつた船は、エルサレムには着かず、方向違ひの此方の岸に着いた。そこには月照彦神、足真彦、少名彦、祝部、弘子彦の五柱が出迎えている。北光神、祝姫、蚊取別等八柱は共に岩山を登つて行く。登って見ると大小四十八箇の宝座が設けられてあり。其処には種々の立派な男神、女神が鎮座して、苦、集、滅、道を説き、道法、礼節を開示して居る。五柱の神司は三人に向ひ、一々その宝座を案内し、そして現、神、幽三界の実況を鏡のごとく写して見たりける。〕【7/50　三五〇】

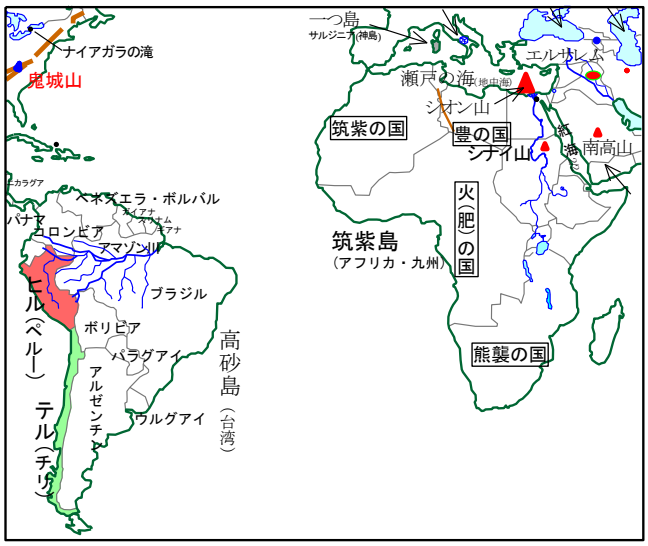
※絶世の美人である祝姫は自分の美貌を誇って長らく結婚をしなかったが、醜男の蚊取別に恋慕され、船の上なので逃げ場を失う。同行の北光神に承諾するよう促され苦悶の末承諾する。実は蚊取別は木花姫命の化身であり、祝姫が霊の夫婦と成る人物（第12巻・夏山彦）に巡り会うまで保護するため仮の夫婦となる。ここには我々には思い及ばない神（木花姫命）の周到なる守りがある

◆第８巻

第１章　　朝日丸

◇朝日丸　筑紫の嶋（アフリカ）→ 高砂島（南米）の智利の国（チリ）　　(登)日の出神、清彦、猿世彦、駒山彦

＊〔日の出神の宣伝使　　乗せ行く船は朝日丸
御稜威も高き高砂の　　智利の都に進むなり〕



朝日丸に乗り合わせた鬼城山の邪神であった猿世彦、駒山彦、清彦は互いに相手の失敗を罵りあっている。清彦は日の出神が高砂島に渡ったと聞き後を慕って乗船していた。【8/１　朝日丸】

朝日丸に乗り合わせた日の出神は一般大衆の動向を探るため船の片隅にかがんでいる。清彦は自分は三五教の宣伝使だと言って世彦、駒山彦の欠点を吹き立てる。怒った二人は清彦を殴るが、じっと堪えてそれには委細構わず五十韻（アイウエオの五十音順）を使って欠点を暴く。【8/2　五十韻】

＊教えに関してなんでも答えてみせるという清彦に対して猿世彦が〔三五教には三千世界一度に開く梅の花、開いて散りて実を結ぶとか、時鳥声は聞けども姿は見えぬ、とかいふ教があるねー〕と問えば、清彦は落語のような屁理屈で答える。そして、〔貴様たちにコンナ高遠無量なる神界の経綸を話して聞かしたつて、耳の三五教だもの真正の事が耳に這入る様になつてから聞かして遣らう。この三五教は身魂相応に取れる教だから、初めて三つ子に聖賢の教を説いたところで、石地蔵に説教するやうなものだ。まして鰐や、蚯蚓の干乾に、真正のことを言うて堪るかい。身魂を早く研け、研いたら身魂相応の説教をしてやるワイ〕と耳の痛いことを言

います。そこに宣伝歌を歌う神が現れる。

〔吾は暗夜を照らすてふ　日の出神の宣伝使　端なく此処に教の舟　心を一つに托生の
救ひの舟に帆を上げて　荒浪猛る海原や　黒雲つつむ常世国　天の岩戸を押開けて
日の出神の神国と　造り固めむ宣伝使　造り固めむ宣伝使　と爽かに歌ひ出したる神人あり。清彦はこの声に驚き合掌しながら、日の出神の英姿を伏拝み、落涙に咽せびける〕　この原稿の主題である救いと教えの船が歌われている。【8/3　身魂相応】

＊日の出神が天地の神の高徳を説き始めると、にわかに暴風が吹き荒れるが宣伝歌により天候は急速に収る。日の出神の神徳に感じた人々は集まり教理を拝聴する。そして、〔ここに清彦は、今までの凡ての罪悪を悔い改め、日の出神の弟子となり、高砂島に宣伝を試むる事となりぬ〕
日の出神は船中の人々の雑談の中に筑紫島を一緒に巡った（７巻）面那芸の司の遭難を聞く。【8/4　烏の妻】

＊日の出神は清彦に対してこれから面那芸の司を救うため竜宮城へ行くので、お前は何も心配せず宣伝に励め。また、猿世彦、駒山彦は〔今迄の心を改め神の教に随へよ〕と言い残し海中に飛び込む。船は港に着き３人は上陸するが清彦は二人を残して闇にまぎれて姿を隠す。【8/5　三人世の元】

＊闇の中で「清彦の欠点を剥いてやろう」という声に清彦は弱り果てるが、前方より飛んできた火の玉が墜落すると〔清彦は闇中に光を現はして、立派なる日の出神と少しも違はぬ容貌と〕なる。【8/6　火の玉】

＊〔猿世彦、駒山彦、よく聞けよ。吾は汝の知る如く、今までは八頭八尾の大蛇の霊魂に誑かされ、曲事のあらむ限りを尽くしたることは、汝らの熟知する通りなり。然れど吾は三五教の大慈悲の神の教を聞きてより、今までの吾身の為し来りし事が恐ろしく且つ恥しくなり、日の出神の後を追ひ、真人間に成つて今までの悪に引かへ、善一筋の行ひをなさむ、悪も改心すれば此通りといふ模範を、天下に示すべく日夜、神に祈りゐたるに、神の恵みは目の当り、不思議にも名さへ目出度き朝日丸に乗り込み、日の出神様に廻り会ひ、結構な教訓を賜りてより、吾霊魂は、神直日大直日に見直し聞き直され、今は清き清彦が霊魂になつて世界の暗を照す日の出神の御名代・・・〕清彦は日の出神の守護により光まばゆきまでの姿となる。【8/7　蛸入道】

＊三神司はそれぞれに別れて行き、猿世彦はアリナの滝で狭依彦と名のり、村人に洗礼を施していたが、この滝の更に奥にある岩窟の前の鏡の池で神（月照彦）より宣伝使としての教育を受けテルの国の司となり、狭依彦司となる。駒山彦は北へ進みテルの国に神教を宣伝する。【8/8 改　心祈願】
※鬼城山の清熊（清彦）、猿世彦、駒山彦らは偶然に朝日丸に乗り合わせる。清彦は日の出神が高砂島に渡ったと聞き後を慕って乗船している。船の中では互いに旧悪を大衆の前で暴露し足を引っ張り合う。日の出神が天地の神の高徳を説くと、にわかに暴風が吹き荒れるが宣伝歌により天候は急速に収る。日の出神の神徳に感じた人々は集まって教理を拝聴する。日の出神が船での噂を聞き面那芸の司の遭難を知り急きょ竜宮へ行く。清彦は日の出神の御名代として秘露の国に行き紅葉彦命と名を賜り守護職となる。また、猿世彦は智利の国のアリナの滝で三五教を広め、鏡の池で月照彦（大八洲彦命）の戒めを受け狭依彦司となる。
駒山彦もまた月照彦の神の教訓を受け、後に羽山津見神と改め黄泉比良坂の神業に参加する。
※清彦のように、忍耐強さと総ての過去の罪悪をさらけ出し悔い改める心。何事も全てを神の御手に委ねる心が大切と教えているのでしょうか。
〔されど俄宣伝使の猿世彦は未だ三五教の教理には徹底しをらず、只神を祈ることのみは一生懸命なりき。夫故平然として彼が説く所の教理は矛盾脱線に満ち居たれども、誠の神は彼が熱心に感じて神徳を授けられたるなり。〕

◆第９巻

第３章　三　笠　丸

◇三笠丸　《エルサレム→ 》筑紫の嶋（アフリカ）ヨルの港→ 高砂島（南米）の智利の国（チリ）→ 《珍の都（アルゼンチン）》　(登) 松代姫、竹野姫、梅ヶ香姫、照彦、足真彦（大足彦）

＊〔主人を思ふ真心の　赤き心は紅葉の　色にも優る照彦が　父に会ふ日を松代姫　心の竹野ある限り
山と積みてし苦しさや　谷の戸開けて鶯の　鳴く音淋しき梅ケ香姫の　貴の命と諸共に
エデンの河を打渡り　世は九分九厘足曳の　山を打越え野を渉り　心も勇む四人連
心つくしのアフリカの　ヨルの港に着きにけり。
今や船は帆に風を孕んで智利の国へ向はむとしてゐる。松代姫の一行も漸くにして船に乗りたるか、三笠丸は青葉滴る岸を離れて西へ西へと波の琴を弾じながら、海面静かに滑つて行く。・・・
『筑紫の国をあとに見て　ウヅの都へはせて行く　道は三千三百里　通ふも遠き波の上〕

聖地エルサレムを出た桃上彦命の三姉妹は従僕の照彦と共に父を訪ねてアフリカのヨルの港より三笠丸に乗って南米智利の国へと向かう。【9/3　三笠丸】

＊〔さしもに広き海原を、天に憚らず地に怖ぢず、我物顔に吹きまくつた海風も、瞬く間にピタリと止みたれば、又もや船客は囀り出したり。〕

暴風雨はピタリと止み、乗客は喧嘩を始める。三笠丸に乗り合わせた大足彦（足真彦）は幽かなる声で、三姉妹が「意富加牟豆美」であることを宣伝歌をもって歌う。【9/4　大足彦】

＊〔数十艘の大船小船は真帆に風を孕んで、堂々と陣容を整へ進み来る。三笠丸は風に逆らひながら、櫂の音高く進み行く。向ふの大船には、気高き女神舷頭に立ちあらはれ、涼しき瞳滴るが如く、楚々たる容貌、窈窕《美しくたおやかなさま》たる姿、いづこともなく威厳に満ち東天を拝して何事か祈るものの如くなり。傍に眉秀で鼻筋通り、色飽くまで白く、筋骨たくましく、眼光炯々として人を射る大神人立ちゐたり。船中の人々は期せずして此の一神に眼を注ぐ。〕

ここで三笠丸は竜宮を出られた神伊邪那美大神および日の出神等が乗られ、東へ向かう船と行き交う。そこには父桃上彦も乗っているが、姉妹は知らない。　【9/5　海上の神姿】

＊〔この世を渡すのりの船　三五教を守る身の　わが乗る船に穴はない　あな有難や三笠丸
あな尊しの三笠丸　神の恵を笠に着て　清き教を杖となし　みろくの船に乗せられて
高砂島に進み行く　〕

にわかに暴風が吹き船は暗礁に乗り上げ海底に沈まんとしたとき主従四人は天に向つて合掌し安全を祈願をします。竹野姫は立って宣伝歌を歌うと風は止み夏の太陽は煌々と輝き不思議にも船は滑るように西へ西へと進み行く。船客は安心し又雑談にふけり、以下の会話が聞かれる。

〔甲『エライ事だつたなア。この船には三人の弁財天が乗つて御座つたお蔭で生命が救かつたのだよ。マアマア吾々もお蔭で地獄行きを助かつた。一寸下は水地獄だ、カウして一枚板の上は安楽な極楽だが、一寸違へば地獄でないか、これを思へば吾々はよく考へねばなるまい。日々に行つて居る事は恰度此船のやうなものだ。一寸間違うたら地獄だから、うかうかしては此世は渡れない、なんぼ陸ぢやと言つて、沈まぬとも言へぬ。陸に居ても悪い事をすれば、心も沈み身も沈み、一家親類中が皆沈んで、浮かぶ瀬がなくなつて了ふのだ。うかうかしては暮されぬわい』

乙『さうだネ、何は兎もあれ有難い事だつたネ。あの三人の女神さまは、アリヤ屹度吾々のやうな人間ぢやないぜ。あまり吾々は慢心が強いからナ、此世は人間の力で渡れるものなら渡つて見よ。力のない智慧の暗い、一寸先の分らぬ愚な人間が、豪さうに自然を征服するとか、神秘の扉を開いたとか、造化の妙用を奪ふとか、くだら

ぬ屁理屈を言つて威張つて居つた所で、今日のやうな浪に遭うたら、毎日日日船を操縦ることを商売にして居る船頭さまだつて、どうする事も出来やしない。人間は神様を離れて、何一つ此世に出来るものはないのだ。かう言つて吾々が物を言つてるのも、皆神様の尊い水火がこもつて居るからだ。ウラル教の宣伝使のやうに、呑めよ騒げよ一寸先は闇よ、暗のあとには月が出るなぞと、勝手な熱を吹いて、ドレだけ威張つて見た所で、人間たる以上はダメだ、ドウしても、神様の広き厚き御恵みに頼らねばならないのだ。アヽ惟 神霊幸倍坐世惟 神霊幸倍坐世』

丙『オイお前は中々よい心得だ。ソンナ結構な事、何処の誰に聞いたのだい』

『吾は黄金山に現はれ給ひし埴 安 彦 命さまのお始めになつた、三五教の教を聞いて、それからと言ふものは、あれ程好きな酒が自然に飲めなくなつて、此頃は少しの御神酒を頂いても、直に酔うて心持ちがよくなつたよ。今までは酒を飲めば飲むほど、梯子酒で飲みたくなり、腹は立つて来る。一寸したことにも**ムカ**ついて、女房を殴る、徳利を投げる、盃は破れる、丼鉢は踊る、近所の人達に悪酒ぢや、酒狂ぢやと言はれて持て余された者だが、どうしたものか、三五教の飯依彦と言ふ竜宮島の宣伝使が熊襲の国へ出て来て、皆のものを集めて、鎮魂の洗礼を施してくれたが最後、気分はスツカリして酒は嫌ひになり、何とはなしに世の中が面白くなつて来たのだ。ホントによい教だよ。お前も一つ三五教に入信したらどうだい。大にしては治国平天下の教、小にしては修身斉家の基本たるべき結構な教の道だよ』

丙丁戊『成程結構だなア。吾々も無事安全な時には、ナーニ神が此世に在るものか、人間は神だ、人は万物の長だ、天地経綸の司宰者だと威張つて居たが、今日のやうな目に遇うては、吾輩のやうな無神論者でも、何だか腹の中の悪いコロコロが、喉から飛び出しよつて、本当に叶はぬ時の神頼み、手を合して縋る気になつて来るワ。アヽ人間と言ふものは弱いものだなア』

諸人の囁き声を満載した神の守護の三笠丸は、万里の浪を渡つて、其日の黄昏時、智利の港に近づきたり。〕

【9/６　刹那信心】

＊船は漸くにして黄昏時に、智利の港内に安着した。船中の雑談で桃上彦が巴留（ブラジル）の都の鷹取別の城下で数百人の駱駝隊に殺され砂漠の中に埋められたと聞く。照彦は話し手の男に金を渡して情報を得ようとするが金を取って逃げられる。【9/７章　地獄の沙汰】

＊父が死んだと聞いてうち沈む三姉妹に照彦は励まそうとします。そこえ巴留の国の者と名乗る大蛇彦（木花姫命の化身）が現れ桃上彦が生きており、正鹿山津見神となり今日は五月姫との結婚式だと告げて煙と消える。【8/９章　再生の思い】

※世界の大峠である黄泉比良坂の戦いで活躍する「桃の実」の三姉妹の旅立ちである。アフリカのヨルの港より三笠丸に乗って南米智利の国へと向かう。船中では暴風に遭い竹野姫の宣伝歌により嵐は止む。父親の桃上彦の遭難を聞き心痛めるが、船は智利の国に着く。

第１０章　言葉の車

◇高砂丸　《エルサレム→ 》→ 竜宮島（豪州）（登）桃上彦

＊〔浪に浮べる一つ島　竜宮の島に渡らむと　高砂丸に身をまかせ　・・・・〕

桃上彦は五月姫との結婚式の席で、述懐の歌を歌う。その内容は

常世彦や常世姫に欺されて地の高天原を追われた桃上彦は竜宮島に渡ろうとして遭難するが琴平別命に救われ、竜宮城の門番となっていた。許されて神伊邪那美の大神や日の出神、淤縢山祇、面那芸と共に竜宮を出る。そして神伊邪那美の大神と別れ高砂島の智利の国に着き　日の出神より珍の都 の守護職と任ぜられる。しかし、 巴留の国を救おうとして行くが高鷹取別の部下に包囲され沙漠の中に埋められる。そこを逃れ温泉で療養中に淤縢山祇や五

月姫、珍山彦、駒山彦、に助けられる。【9/10　言葉の車】

第１８章　初　陣

◇アタル丸　　ハラの港（智利）→ アタルの港（秘露＝ペルー）　　（登）珍山彦、松、竹、梅の三姉妹、虎公、熊公。

＊〔珍山彦は松、竹、梅の三人と共に、草の衾に石枕、数を重ねて漸々に智利の国の南方ハラの港に着きぬ。夜船は今に出帆せむとする間際なり。十三夜の月は、満天黒雲に包まれて光を隠し、一点の星影もなき真の闇なり。この船の名はアタル丸といひ、アタルの港より、ハラの港に数多の果物を積み、人を乗せ来り、今や国に帰らむとする時なりき。〕

※船中では雑談が始まる。虎公は以前の三笠丸での悪事（７章）を得意げに話し出す。それを聞いた珍山彦は松代姫に宣伝使としての初陣だとして、虎公を改心させるよう促します。そこで松代姫は宣伝歌を歌う。

〔暗き船の中にはこの歌を聞いて、何れも感歎する声頻りに起れり。虎公は以前の元気にも似ず、大声をあげて泣き叫び伏しぬ。〕【9/18　初陣】

＊〔アタル丸の船中は昼の如く、誰彼の顔も明瞭に見え来る。珍山彦は虎公の話相手なる熊公に向つて霊をかけたれば、熊公は忽ち身体震動して、ここに神懸状態となり口を切つて、『此方は大蛇彦命である。いま虎公に申渡すべき事あれば、耳を澄まして確と聴け』と雷の如くに呶鳴りつける。・・・

『何時までも悪は続かぬぞよ。動きのとれぬ汝の自白、閻魔の調べは目のあたり、大蛇彦が今言ひ聞かす、神の教を**しつかり**聴け。木に餅のなる様な、うまい事ばかり考へて苦労もせずに、他人の苦労の宝を奪ひ、誇り顔に述べ立てる怪しき卑しき汝が魂、心の鬼の囁きを吾と吾手に白状せしは天の許さぬ所、審神者の眼に睨まれて、その本人がこの船に居るとも知らず知らずに口挙げ致した。悪は永うは続きはせぬぞ。速かに前非を悔い、澄み渡る大空の月の如くに心を洗へ。・・・些の悪でも積み重ぬれば根底の国に行かねばならぬ。強さうな事を言つても、人間の分際として木の葉一枚自由にならぬ、障子一枚先の見えぬ人間、天地の神を畏れよ。長い間に重ねた罪はわが身を亡ぼす剣の山だ。憎まれ子世に覇張る、西も東も弁へずに、吾さへよけりやよいと申して、人の目を**ぬすみ**、宝を盗み取り、悪の身魂に狙はれて根底の国に連れ行かれ、喉から血を吐く憂き目に遇うて恥を曝し、果敢なき運命に陥るやうな僻事を改めよ。・・・悪は一旦栄えても永うは続かぬ、滅の種子だ。・・・・生きても死んでもこの世の中は神のまま、長い月日に短い生命、太う短う暮すが得だと日夜吐いた虎公のその吠え面は何の**ざま**、誠の道を踏み外し、身慾に迷うて無理難題を人に吹きかけ、誠の人を誑かし**むしり**取つたるその金子は、大蛇となつて火焔を吐き、冥途へ送る火の車だ。大勢の中で面目玉を潰されてもがき苦しむのも自業自得だ。・・・改心いたして生れ赤子の心になり、今までの**ゐぐ**たらしい心を立替へよ。・・・**めいめい**罪の大小軽重こそあれ、九分までは皆悪魔の容器だ、罪の塊だ。大蛇彦命が一同に気をつけるぞよ。・・・』〕

※大蛇彦命は準々と諭す。虎公はこの教訓に胸打たれ身の置き処もなく煩悶の結果、海に向つて身を投げた。熊公も虎公を助けようとして海に飛び込む。【9/19　悔悟の涙】

＊姉妹は舷頭に立ち両名を救うべく宣伝歌を歌って神に祈願する。船中では再び雑談が始まる。

〔丙『・・・虎公のやうに露骨に悪をやるか、やらぬかだけのものだ。善人らしい蚤一つ殺さぬやうな優しい顔した奴の中に却て悪い奴があるものだ。人間から悪人ぢや悪人ぢやと嫌はれる者に却て善人があつたり、聖人君子を気取つて、世の中の人に賢人ぢや、善人ぢやと持て囃される人間の中に却て悪人があるものだ。悪魔と言ふものは善人の身体を容器にして化けて悪い事をやるものだよ。之だけ悪の九分九厘まで栄えた世の中の人間に褒めらるる者はきつと悪人だ。彼奴は悪い奴だと世の中から攻撃される人間に真実の善人があるものだ。あ

の虎公と言ふ奴は随分名高い悪人だが、真実の彼奴の性来は善人だと見えて、悔悟の念に堪へ兼ね、大切の生命を捨てたぢやないか。人間は矢張り神の子だ、・・・。吾々も一時も早く心の雲を取り払つて、今夜の月の様な美しい心になつて世の中を渡りたいものだなア』　アタル丸は漸うにして、翌日の五つ時にアタルの港へ安着した。波止場には虎公、熊公が立つてこの船を待ち迎へて居る。【9/20 心の鏡】

＊ 七日七夜の月日を浴びて、折からの南風は真帆にアタルの港に着き見れば、正に月照十三夜、海中に身を投げたる熊公、虎公の二人は埠頭に立ち、松代姫の一行を嬉しげに迎へて居る。船客は二人の顔を見て、『ヤアヤア、ヨウヨウ』と驚きの声を放つにぞ、虎公は船客一同に向ひ、・・・・〕

※虎公は松代姫の宣伝歌を聞いて穴にでも入りたいような心持ちになり、更に熊公に神懸かりした大蛇彦に旧悪を暴かれ罪の恐ろしさから月の大神さまに秘かに懺悔し海に身を投げますが。虎公を助けようと海に飛び込んだ熊公と共に巨大な亀に救われます。そして熊公は再び神懸かりとなり、日に夜に教訓を与えられます。

自分のやうな利己主義の人間は世の汚れとなるから、どうか死なして下さいと、又もや海中に身を躍らしますが、熊公は神懸のままに、虎公の首筋を掴んで亀の背中に捻伏せ『こら虎公、汝はすでに救はれた、汝の刹那の祈りは真剣だつた。天地神明に感応した。今の汝は今までの悪逆無道の虎公でない、この世を清むる明礬の様なものだ。百石の濁り水も、一握りの明礬を投ずれば清水となる。神の栄光に浴した汝は、これより悪魔の猛り狂ふ泥水の世を、塩となり明礬となつて清めよ、澄ませよ、すべての物に味を与へよ』と厳しく教訓されました。そして、志芸山祇と言う名を賜り、カルの国に行って宣伝使になれとの命を受けました」と話す。さらに、無事港に着いた両人は首より下は石のように硬直して動かず、三姉妹と照彦に許しを請います。そして、船の人々に向かって『私の改心を鑑として真心に立ち帰り、心から神に祈りを捧げて下さい、幸ひ宣伝使がおいでなされば、神言を教はって、朝なタなに神を讃美し、誠の心に立ち帰つて祈願をなされませ』と話す。

アタルの港に着いた三姉妹はそれぞれに別れて常世の国を目指して宣伝の旅に向かう。【9/21　志芸山祇】

＊清彦と別れた駒山彦は一人旅し、間の国（パナマ）で月雪花の三姉妹と期せずして再会する。【9/32　一弦琴】

◆第１１巻

第８章　明志丸

◇明志丸　明志の湖 ⟷ タカオの港　（登）東彦、高彦、梅ケ香姫、秋月姫、深雪姫、橘姫、、鉄彦、時公。八公、勝公、鴨公

＊黄金山を発ってきた高彦（天の児屋根の神司）はウラル彦やウラル姫を言向和すべくクスノが原で時公に会う、途中人生の本義、死生観を教示しつつ新玉原で東彦（石凝姥神）、梅ケ香姫、鉄彦に会う。長方形の岩に住む大蛇を言向和そうと進むが、すでに月雪花の三姉妹の宣伝使が言向和し、鎮魂を施したところであった。火打ちを出し原野を焼き払い、鉄彦、時公に原野の開墾を命じる。のちにクスの都として栄える。二男四女の宣伝使は新玉原を西へ西へと明志の湖方面へ進み行く。途中北の森で村人が押し寄せてきたので鎮魂により勝公を霊縛し、宣伝歌を歌いながら進み行く。

〔明志丸は数十の船客を乗せ、今や出帆せむとする時であつた。梅ケ香姫は急ぎ船中の客となつた。骨を裂く様な寒風はヒユーヒユーと笛を吹きて海面を掃き立てる。浪に揉まれて船の動揺は刻々に激しくなつて来た。大抵の船客は寒さと怖さに慄ひあがつて、船底に小さくなりてかぢりつく様にして居る。中に四五人の男は腰の瓢の栓を抜いてソロソロ酒を飲み始めたり。〕

※明志の湖（現ウラル海）を行き交う明志丸に乗船した梅ケ香姫は北の森の八公、勝公、鴨公が乗船しているので宣伝歌で諭すと、勝公は暴力にうったえようとするが、鉄谷村の時公がこれを戒める。【11/8　明志丸】

一行は西岸のタカオの港につき寒風荒ぶ荒野が原をコーカス山目指して進む。途中、人を食うという黒野ヶ原の孔

雀姫の館によると「飲めよ騒げよ一寸先や暗よ、暗のあとには月が出る」と歌う声に、改心しきれない勝公達は喜んで飛び込む。ところが孔雀姫は「オモテ教」と聞き驚く。梅ケ香姫の宣伝歌により孔雀姫は松代姫と判る。勝公は本心から改心しこの館に留まり、懸命に三五教の宣伝歌を歌い枉神を言向和すこととなった。松代姫、梅が香姫、時公、八公、鴨公はコーカス山に向かう。【11/9～12】

第１４章　鏡丸

◇鏡丸　　琵琶の湖（カスピ海）→ 琵琶の湖の西岸　　（登）松代姫、梅ケ香姫、時公、八公、鴨公。

＊〔**松代姫、梅ケ香姫は時公等を引伴れ、一望千里の雪野原を、日数を重ねて遂に琵琶の湖の岸辺に着いた。湖上風波烈しきため已を得ず、二三日此の岸辺に空しく日を過し、漸く船中の人となつた。此の船の名を鏡丸と云ふ。数十人の乗客は先を争うて鏡丸に乗り移り、一行五人もやつと安心したものの如く船中の客となりける。**〕

※松代姫、梅ヶ香姫等は一望千里の雪野原を、日数かけて琵琶の湖につく。鏡丸に乗り込み五日五夜かかって西岸に着く。五人は宣伝歌を歌いながら西北さしてコーカス山へ向かう。船中の雑談でコーカス山には大気津姫が贅沢な暮らしをしており、そこへ向かった竹野姫が遭難したことを知る。【11/14　鏡丸】

第１８章　　琵琶の湖

◇汐干丸　　琵琶の湖（カスピ海）→ 梅島の岩窟の港 → コーカス山方面　　（登）松代姫、梅ケ香姫、東彦、時公、八公、鴨公。牛、馬、鹿、虎

＊松代姫、梅ケ香姫は３人の伴を連れ汐干丸に乗り再び琵琶の湖を渡って行く。梅島の岩窟の港に立ち寄りコーカス山の眷属に巡り会い、松代姫一行は牛、馬、鹿、虎を加えて宣伝歌を歌いながら、コーカス山に向かって行く。牛公のすすめで岩窟で一夜を明かすこととなり、神言奏上中に石凝姥（東彦）の宣伝使にめぐりあう。その時押し寄せてきたコーカス山の魔神に対し　松代姫、梅ケ香姫は神言を奏上し、時公は飛び来る矢を防ぎ、東彦は宣伝歌を奉唱すると矢の音はぴたりと止まる。数多の捕手は雪谷にうずくまり、中には感涙にむせぶ号泣する者もあった。
松代姫、梅ケ香姫は三五教の教えをねんごろに説き諭すと、こころを改め、大気津姫の部下のヤッコスの帰順に全力をつくすこととなる。【11/21　俄改心】

◆第１２巻

第１６章　　国武丸

◇国武丸　　呉の湖（黒海）→ （立花嶋）→ コーカス山方面　　（登）石凝姥、高光彦、玉光彦、国光彦、行平別、時置師

＊〔**天に月日の光なく、地に村雲ふさがりて、奇しき神代も呉の海、国武丸に帆を揚げて水夫の操る櫂の音は、波に蛇紋を画きつつ、コーカス山の麓を指して進み行く。 風も無く、油を流したやうな静かな、淋みのある海面を船脚遅く、波掻き分けて北東指して進む。此の海上に漂ふこと旬日、数十人の船客は四方山の話に耽り居るのみ。・・・・　斯く話す折しも俄に一陣の颶風颯と吹き起つて船をキリキリ廻し、山岳の如き浪を立て数十人の生命を乗せたる国武丸は、今や海中に没せむとするの光景とはなりにける。**〕

石凝姥、高光彦、玉光彦、国光彦、行平別、時置師の六柱の神司は国武丸に乗りコーカス山方面へと船出する。船中には無慮を慰めるため話が弾む。他力信仰と自力信仰が話題となり〔**『・・・自分の心の鏡が曇つて居れば、美しいことはないわ、鬼や、大蛇や、醜女、探女が四方八方から取囲むで苦しめに来るだけのものだよ。心相応に神様は現はれ給ふのだ。そこが千変万化の神の御働きだよ』**〕と話す内に暴風となり船は転覆しそうになる。【12/16　国武丸】

＊今や水中に沈まんとする時、声も涼しき宣伝歌により暴風も、忽ち凪いで、呉の海面は畳の上を行くやうに納

まる。

〔得も言はれぬ馥郁たる香気四方に充ち、嚠喨たる音楽聞え、頻りに降り来る花の雨、仰ぎ見れば中空に、天の羽衣翻へしつつ、〕天女の歌う宣伝歌が聞こえてくる。

〔此世を照らす三柱の　中の一人の橘姫よ　底ひも知れぬ呉の海の　司の神と任けられて　常磐に護る吾なるぞ　心を浄め身を清め　罪や穢れを橘の　島に一度は船寄せて　吾言霊を聞けよかし　畏き神の御教を　四方に伝ふる神司　小さき事に囚はれず　虚空の外に身を置きて　神代幽世現世の　奇しき有様明らめて　世人を救ふ皇神の　太き柱となれよかし』〕

と優美なる歌天空に聞え終ると共に、素盞嗚尊の三女神の一柱、橘姫の姿は煙の如く消え紺碧の空には三五の明月皎々として海面を照らす。　【/17　雲の戸開】

＊〔凡て天地の大神の　誠の道に叶ひなば　只一口の言霊も　神は諾ひ給ふべし　祈れや祈れ諸人よ　心一つに祈るべし〕

時置師神（時公）は祈ることこそが肝要だと宣伝歌を歌う。先ほどの暴風も宣伝歌によって鎮まったので船客の甲（牛公）は神の存在を覚るが、宣伝歌を歌ったのが時公と知って旧事のばれるのを恐れて乙（馬公）が挨拶に行こうと誘うが断って隠れる。そこへ委細構わず時置師がやって来るので、牛公はザンブとばかり海に飛び込む。

〔折柄の順風に真帆を上げたる国武丸は何の容赦もなく此悲劇を振り捨てて先へ先へと進行を続くる。〕【12/18　水牛】

＊船中ではこの光景を眼にしてウラル教の目付役仲間の馬、鹿、虎は恐れている。また時置師神が近づいてくるので団子理屈を並べ、しどろもどろになって応対しているとき

〔舟の前面に見上げる許りの水柱立昇るよと見る間に、巨大なる亀の背に載せられて、牛公は嬉しさうに海面に浮むで来た〕【/19　呉の海原】

＊そうこうするうち〔月は西海に没し、久振にて東海の浪を割つて金色の太陽隆々と昇り来る。その光景は得も云はれぬ爽快と畏敬の念に打たれざるを得ざりしと云ふ。 宣伝使を初め船中の人々は、この太陽に向つて拍手再拝、口々に神恩を感謝する声天にも届くばかりなりけ〕【/20　救い船】

＊ここに船中の人々は一人も残らず橘島に上陸する。

〔此島は世界一切の所有草木繁茂し、稲麦豆粟黍の類、果物、蔓物総て自然に出来て居る蓬莱の島である。地上の山川草木は涸れ干し、萎れて生気を失ひたるにも拘はらず、此島のみは水々しき草木の艶、殊更美はしく味良き果物枝も折れむ許りに実りつつあるのである。〕

玉光彦、国光彦に続いて行平別はこの島の実りを解放するよう、橘姫に向かって宣伝歌をもって促す。

〔此時何処ともなく忽然として現はれたる高尚優美の橘姫は、右の手に稲穂を持ち、左の手に橙の木実を携へて来り、天の数歌淑かに歌ひ終つて右の手の稲を天空高く放り上げ給うた。稲穂は風のまにまに四方に散乱し豊葦原の瑞穂の国を実現する事とはなりぬ。左の手に持たせ給ふ木実を又もや中天に投げ上げ給へば、億兆無数の果物となつて四方に散乱しければ、豊葦原の瑞穂国の食物果物はこれより良く実り、万民安堵する神世の端緒を開かれにける。これ天の岩戸開きの一部の御神業なり〕

※橘姫の御神業によるミロクの世の食糧問題をお示しになっている。【12/21　立花嶋】

第２５章　琴平丸

◇琴平丸　　呉の港→琵琶の湖の辺→ 竹の島の近くを通る　　（登）石凝姥、高光彦、玉光彦、、行平別、時置師、　その他船客

＊〔高光彦、玉光彦の宣伝使は時置師神と共に橘島を立出て、呉の港に上陸し、宣伝歌を歌ひながら、天地暗澹たる大野原を進み進みて琵琶の湖の辺に着きぬ。折しも浪高く風烈しく出船を待つこと七日七夜の久しきに亘り、船客は出船待つ間の無駄話に耽り居る。〕

※船客はコーカス山の大気津姫命（貧しい人達を省みず生存競争の悪風を生む、衣食住の非理非道的に進歩発達した社会）がアーメニアへ逃げだした跡に須佐之男命の剣を神実として祭り、月雪花の三女神が御巫子として仕えていたが、世が段々曇つて来たのでそれぞれに、呉の海の橘島と琵琶の湖の竹島、瀬戸の海の一つ島（サルジニア島）にお住まいを替えられたこと。そこえ天教山から変性男子のお使で、天菩比命がサルヂニヤ嶋を攻め、火をつけて焼滅して了つたと船の出発を待ちながら話をしている。

これを聞いた石凝姥神は、『オー、是は大変だ、道聴途説（いい加減な世間の受売り話）とは言ひ乍ら匹夫の言にも信ずべき事ありだ。いよいよ厳霊と瑞霊の誓約が始まつたらしい、まさか違へば天の岩戸隠れにならうも知れない。ヤア時置師神殿、行平別殿、此処でお別れ申す。我は是よりアルプス山に上り日の像の八咫鏡を鍛たねばならぬ。天の目一箇神も大方出かけて居るであらう。貴神は是より竹島に渡つて、秋月姫の安否を探り給へ。さらば……』として急きょアルプス山へ向かう。

湖原を進む船の中では〔甲『きまつた事だよ。天の真名井から此方の大陸は残らず、素盞嗚尊の御支配、天教山の自転倒島から常世国、黄泉島、高砂島は姉神様がお構になつて居るのだ。それにも拘らず、姉神様は地教山も、黄金山も、コーカス山も全部自分のものにしようと遊ばして、種々と画策をめぐらされるんだから、弟神様も姉に敵対もならず、進退維れ谷まつて此地の上を棄てて月の世界へ行かうと遊ばし、高天原に上られて、今や誓約とかの最中ださうぢや。姉神様の方には、珠の御徳から現はれた立派な五柱の吾勝命、天菩比命、天津彦根命、活津彦根命、熊野久須毘命といふ、それはそれは表面は美しい女の様な優しい神様で、心は武勇絶倫、勇猛突進、殺戮征伐等の荒い事を為さる神様が現はれて、善と悪との立別を、天の真名井で御霊審判をして御座る最中だと云ふ事ぢや、姉神様は玉の如く玲瓏として透き通り愛の女神の様だが、その肝腎の御霊から現はれた神様は、変性男子の霊で、随分烈しい我の強い神さまだと云ふ事だ。弟神様の方は、見るも恐ろしい鋭利な十握の剣の霊からお生れになつたのだが、仁慈無限の女神様で、瑞霊といふ事だ。此処で天の安河原を中に置いて、真名井の水に其玉と剣をふり滌いで善悪の立別けが出来ると云ふ事だよ。それだから、三五教が昔から、「神が表に現はれて善と悪とを立別ける、此世を造りし神直日」とかナンとか言つて居るのだ』〕【12/25　琴平丸】

第２７章　　航空船

◇筑紫丸　　ヨルの港（筑紫の国）　→ 竜宮島（オーストラリア）　→ 黄泉島（ムー大陸）　→ 常世国（北米大陸）

（登）祝部神、月照彦神

＊〔三五教の宣伝使、祝部神は月照彦神の化身と共に、黄金山を立出で筑紫の国のヨルの港を船出して、黄泉島の魔神を剿討すべく進み行く。此船は筑紫丸と名づくる大船なり。筑紫丸は竜宮島を経て黄泉島に沿ひ常世の国に通はむとするものなれば、常世の国に渡る船客がその大部分を占め居たり。祝部神は月照彦神と共に、筑紫丸の船客となり、数十日の海路を続くる。海中には種々の変異起り、島なき所に島現はれ、或は巨大なる岩石俄に海中に出没して天日暗く月光も無く、風は何となく腥く、得も言はれぬ不快極まる航路なりける。船中には色々の雑談が例の如く始まり来たる。〕

※そこに暴風が吹き山岳のような波立ち筑紫丸を呑もうとする危険な状態となり、船客一同は互に手を合せ何事か頻りに小声で祈っている。祝部神は立つて宣伝歌を歌うと暴風はピタリと止む。

西北の風がまたもや吹き筑紫丸は矢を射るように黄泉島に近づくと、黄泉島は轟然たる音響をたて見る見る海中に沈もうとする恐ろしさに、船客一同は驚きの目を睜る。

祝部神は言霊の神力は偉大なもので、再び島を海面に浮かばせると言って天津祝詞を奏上し鎮魂をするが島は沈んで行く。島に近づくと海中に身を躍らし島に上陸する。
祝部神アオウエイの言霊(ことたま)の力によって、今にも沈まんとしていた筑紫丸は急速力で黄泉島に近づき水音高く浮き上る。そして、ウ声の言霊に黄泉島は静々と浮き上り始める。船は東風(とうふう)に吹かれ一瀉千里の勢いで常世の国めがけて滑って行く。島の曲津神は祝部神の言霊の息に恐れて、雲を霞と比良坂さして逃げて行く。祝部神は黄泉比良坂の坂の上に月照彦の冥護(めいご)の下(もと)に千引の岩の上に端座し神言を奏上すると、大音響と共に黄泉島は海中に没してしまう。
【12/27　航空船】

因縁、性来について

いんねん（因縁）という言葉をよく耳にします。仏教用語として広く用いられ、日常生活にも使われます。私などはその意味が、真に解っているのやらわかっていないのやら、曖昧模糊とした漢字で過ごしてきました。しかし、因縁を辞書で調べてみると以下の意味があると書いてあります。

【因縁】①〔仏〕ものごとの生ずる原因。因は直接的原因、縁は間接的条件。また、因と縁から結果（果）が生ずること。縁起。転じて、定められた運命。宿命。「前世からの―」

②きっかけ。動機。しかるべき理由。「一大事―」

③由来。来歴。「いわれ―」

④ゆかり。関係。縁。

⑤言いがかり。

霊界物語の中にも多くの「因縁」と言う言葉が出てきます。言葉の意味を正しく捉えることで内容がより明確になってきます。ここでは第１巻から第１２巻までにでてくる「因縁」と書かれたところを何点か取り上げて上記の①～⑤の意味のどれにあたるか考えてみましょう。　　【 】内：数字　巻/章　章題

１、縁起。転じて、定められた運命。（宿命）

▲　『世の元の誠の生神が、時節きたりてこの世に現はれ、因縁（定められた運命）ある身魂（みたま）にうつり太古から言ひおきにも、書きおきにもなきことを、筆と口とで世界へ知らすのであるから、世界の人民が疑ふて真実にいたさぬのは、もつとものことであるぞよ云々』と示されあり。また、

『この神の申すことば、因縁（関係。縁）の身魂でないと、到底腹へば這入らぬぞよ』と示されあり。ゆゑに神縁深き人士にあらざれば、断じて信じ難からむ。　【3／総説】

【考察】：　国祖大国常立命と開祖の関係が神世から定められた運命であり、御筆先を真に理解できるのは神との縁で結ばれた者でないと心から理解できないと述べられ。

▲筆先の中にも、智恵や学では此筆先は到底判るもので無い、因縁（定められた運命）の霊魂に神界の実地が見せてあるから、其者（この）と直（なほ）とでなければ筆先の精神は判らぬぞよ、と記してあるのを見ても判りませう。又時と処と位置とに因（よ）りて、筆先の文句に異同あるのも当然である。軽々しく筆先は人間の論評すべきものではありませぬ。筆先は決して純然たる教典ではありませぬ。　【12／序文】

【考察】：　因縁の霊魂に神界の実地が見せてあるとは聖師の高熊山修行を指し、それは聖師にとっては定められた運命であった事がわかる。其者は聖師であり「直」は開祖である。

２、きっかけ。動機。しかるべき理由

▲稚姫君命（わかひめぎみのみこと）は、天稚彦（あめのわか）と共に神命を奉じて天に上り、天界の神政を司らうとしたまうたが、御昇天の途上において、地上からつき従うた邪神どもにあやまられ、天地経綸（てんちけいりん）の機織（はた）の仕組を仕損じたまひ、つひに地上に降りたまひて国常立命と共に地底に潜ませられ、あらゆる艱難苦労を忍びたまふの已（や）むを得ざるに立ちいたった。稚姫君命（わかひめぎみのみこと）の御失敗の因縁（しかるべき理由）については、後日詳しく述べることにする。　【１／22　国祖御隠退の御因縁（由来）】

▲ 神人らは一斉に東北の天を仰いで視た。祝部神は尚も語をついで、
『すべて神のなす業は、斯くの如きものである。今まで蒼空一点の雲翳《くもり》もなく、月は皎々として中天に輝き、星は燦爛《きらめき輝く》として満天に列を正し、各大小強弱の光を放つてゐる。地上の吾々凡夫は、実に無知識無勢力である。何時までも天空に明月輝き、星光燦爛たるべきものと、心に期する間もなく、忽然として一塊の怪雲現はれしは、果して何物の所為《しわざ》であらうか。変幻出没窮まりなく、神機無辺の活動はこれ果して何物の所為であらうか。すべて宇宙間一物と雖も、原因なく因縁（しかるべき理由）なくして現はるるものはない。しかしてその原因、因縁（きっかけ）は到底凡夫の究めて究め尽す限りではない。諸神人の中に、果して彼の一塊の怪雲は如何に変化するかを知れる者ありや。恐らく一柱として之を前知したまふ神人はあらざるべし。吾々は天地の神の教を説く宣伝使の身としても、一分先の黒雲の結果いかになりゆくかを覚ること能はず、かくのごとき暗昧愚蒙の知識力を以て、神明の聖霊を云為《言行》し、神の存否を論争するがごときは、あたかも夏の虫の冬の雪を知らざるがごとき愚蒙のものである。視られよ、彼の黒雲を、次第々々に四方に向つて拡大するに非ずや。其の結果は雨か、嵐か、果た雪か、地震か、雷鳴か、天地の鳴動か、吾々の知識力にては、到底感知する事能はず、唯地上の神人は、宇宙の大原因たる大国治立尊の意思に柔順に随ふのみである』
と舌端火を吐いて諄々と宣伝した。　【5／35 波上の宣伝】
【考察】：　ここは、瀬戸の海の一つ島（サルジニア島）に漂着した船客達が祝部神の説教を聞く場面である。②番目の意味で使われている

3、由来。来歴

▲黒彦『俺を雀と云うたが、雀の因縁（由来）知つてるか』
狭依彦『知つとらいでか、鈴の様に矢釜しく囀るから雀だよ。四十雀の様に、始終ガラガラ吐かしよつてな』
黒彦『ソンナラ鷹の因縁（由来）知つてるか』
狭依彦『高い処へ飛ぶから鷹だ。そこら中を飛び廻るから鳶と云ふのだ』　【8／9 鏡の池】
【考察】：　スペリオル湖でミイラになった猿世彦は改心しアリナの滝で、名を狭依彦と改め洗礼を施している。そこえウラル教の黒彦が来て狭依彦をへこまそうとする場面での会話です。

▲その玉の井の湖を占領せむとして、大自在天の部下なる牛雲別、蟹雲別と云ふ悪神が、攻めよせ来たり、竜神さまと鬼神との戦ひがあつて、その時には天へ舞ひ上り、二つに分れて出来たのがこの呉の海と、琵琶の湖だよ。さう云ふ因縁（いわれ）の有る此の海に何うして悪神さまが住居を為さるものかい。　【12／16 国武丸】
【考察】：　ここでの因縁は呉の海と琵琶の湖が出来た由来を指す。第３巻第５篇「万寿山」の第 15、16 章に詳しく出てくる。

4、ゆかり。関係。縁

▲石凝姥『蛇掴の肉体は逃げ去つたが、其霊が俺に憑つて、貴様を喰へと云ふのだ。必ず石凝姥を鬼の様な奴と恨めて呉れなよ。俺に憑つた副守護神が、貴様をこれから喰ふのだよ』
『あなた、そんな殺生な副守護神を去して下され』　　梅ケ香姫『ホヽホヽホヽ』
時公『コレコレ梅ケ香さま、旅は道連れ世は情だ。かうして三人この深山に出て来たのも深い因縁（縁）があつての事でせう。貴女宣伝使なら、あの副とか守とか云ふものを去して下さいな』　【10／35 アルタイ窟】

【考察】： 鉄谷村の曾長鉄彦の娘清姫はアルタイ山の鬼、蛇掴に人身御供にされますが、石凝姥神と門番の時公は梅ケ香姫を身代わりにしてアルタイ山の山口で退治した後の会話です。

▲附言

夫婦となるべき霊、親子となるべき霊魂、主従師弟となるべき身魂は、固より一定不変のものである。併し乍ら世の中の義理とか、何とか種々の事情の為に已むを得ず、不相応の身魂と結婚をしたり、師弟の約を結んだりする事がある。但し霊と霊との因縁（関係）なき時は、中途にして破れるものである。蚊取別の天使は、祝姫の霊の夫婦に巡り会ふまで、他の異りたる霊と結婚をなし、天分使命を中途にして過たむ事を恐れ、種々と工夫を凝らし、一旦自分の妻神と名付け、時機の来るのを待たせつつあつたのは、神の大慈大悲の御守護であつた。 【12／15 宣直し】

【考察】：ここで「みたま」と言う言葉に「霊」、「霊魂」、「身魂」と漢字が当てられ、その関係を明らかに区別しています。夫婦となるのは一霊の四魂が揃うこと。親子と成るのは縁ある組み合わせの魂がなること。主従師弟の関係は現世に於いて縁ある身魂（肉体と魂）が上下関係を持つことではないでしょうか。

▲鹿公『斯様斯う斯うシカジカの因縁（縁）によつて、しかも同じ国武丸に一蓮托生、袖振り合ふも他生の縁、躓く石も縁の端、団子食ふのも囲炉裡の框』 【12／19 呉の海原】

5、言いがかり

▲彼奴は**グデン**虎の**グニヤ**虎の喧嘩虎と云うて大変に酒の悪い奴だ。指一本でも触へ様ものなら、因縁（言いがかり）をつけよつて**ヘタバリ**込んで、十日でも二十日でも愚図々々云うて只の酒を飲む奴だ。【8／20 張子の虎】

【考察】： まさに言いがかりである。

▲ かくのごとく天教山にては、上中下の身魂の神柱は、各自部署を定めて地上の世界を救済のために宣伝者となつて巡回し、かつ先に地上に散布されたる身魂は、美はしき神人と出世して各地に現はれ、この宣伝者の教を聞いて随喜渇仰した。説く者と聞く者と意気合するときは、神の正しき教は身魂の奥に沁みわたるものである。あたかも磁石の鉄を吸ひよせるごとき密着の関係をつくることが出来る。これらを称して身魂の因縁（縁）といふ。

ゆゑにいかに尊き大神の慈言といへども、教理といへども、因縁（縁）なき身魂は、あたかも水と油のごとく反撥して、その効果は到底あがらない。後世印度に生れた釈迦の言に、『縁なき衆生は度し難し』と言つたのも、この理に拠るのである。ゆゑに大神に因縁（定められた運命）あるものは、この浅深厚薄に拘はらず、どうしても一種微妙の神の縁の絲に繋がれて、その信仰を変ふることはできない。

神諭にも、

『綾部の大本は、昔から因縁（定められた運命）ある身魂を引寄して、因縁（関係）相応の御用をさせるぞよ』と神示されたのも、遠き神代の昔より、離るべからざる神縁の綱に縛られてをるからである。

『神が一旦綱をかけた因縁（関係ある）の身魂は、どうしても離さぬぞよ。神の申すことを背いて、何なりと致して見よれ。後戻りばかり致すぞよ』

との神示は、神の因縁（定められた運命）の綱に繋がれてをるから、自由行動を取りつつ、一時は都合よく行くことあるも、九分九厘といふ所になつて、神よりその因縁（関係）の綱を引かるるときは、また元の大橋へ返らねばならぬやうになるものである。

これを神諭に、『引つかけ戻しの仕組』と示されてある。 【5／26 艮坤の二霊】

【考察】：　「これらを称して身魂の因縁といふ」とあります。ここでの因縁は神の御綱で結ばれた縁ある身魂でしょうか。　また、「ゆゑに大神に因縁あるものは」の因縁は昔からの定められた運命によって、一種微妙の神の縁の絲に繋がれているのです。この関係は現在の綾部の大本でも同じ事です。

▲『神追ひ』と云ふ事を大本に写して見る時は、第一に各役員の如きは、総て鬚を切り手足の爪まで抜きて大本へ神追ひに追はれ玉うた人々であります。併し乍ら現今の社会の総てが右諸子の如くに神追ひに追はれ、且又鬚を切り手足の爪まで抜かしめられては却つて天下の政治を乱し、産業の発達を阻止し、国力を弱める事になりますから、神様は神業に直接奉仕すべき身魂の因縁（定められた運命）ある真人のみに綱を掛けて、大本に御引寄せに成つたのであります。故に身魂に因縁（しかるべき理由、動機）の無い人々は、最初から何程熱心に神業に奉仕せむとしても、神様から御使ひに成らぬから、何等かの機会に不平を起して脱退せなくてはならぬ様な破目に陥り、終には某々氏等の如く大糞的に悪胴を据ゑて、一生懸命に大本の攻撃を始める様に成るのであります。亦深い因縁（縁）の有る人士で、鬚を切り兼ね、手足の爪を抜き兼ねて、遠くから奉仕されて居る人々もまだまだ沢山にあります。大本の神業に直接奉仕する真人と、又間接に神業に奉仕されて居る人士とがあります。是は鬚を切ると切らないとの差異でありますが、因縁（縁）ある人士は勇猛果断一日も早く、神業に直接参加せられたいものであります。さうで無ければ天下に跳梁跋扈せる八岐の大蛇を亡ぼし、天の下を至治泰平ならしむる神業を完全に遂行する事が出来ないのであります。　【11／15　大気津姫の段】

【考察】：　「神追ひ」とは一切の地位を擲ち、一切の財産を顧みず、物質的慾望を捨てて神明の道を天下に宣伝する事と示されています。そうした身魂（人）は神から決められた人たちであり、そうした動機を持たぬ人は初めは熱心でも、神様がお使いにならないのでいずれは離れて行くのである。また、一切をなげうって大本に来て神業に直接奉仕する人と外にいて間接的に奉仕する人とがあるが、神との縁が結ばれた人は一時も早く奉仕に参加しなければ神業が完成しないと示されている。

▲珍山彦『**このはな**さまは故あつて女房は持ぬのだ。それ丈は怺へて呉れ。余り俺が洒落るものだから、本当にし居つて痛うない腹を探られて迷惑だよ。さうぢやと云つて、此の可愛らしい五月姫が嫌ひだと云ふのでは無い。好きの好きの大好きだが、女房を持れぬ因縁（しかるべき理由）があるのだよ』

『オイ蚊々虎、ドツコイ珍山彦、その因縁（由来）を聞かうかい』

『お前に聞かせるやうな、因縁（理由）なら何に隠さう。こればかりは怺へて呉れ。俺は未だ未だ重大なる任務があるのだから』・・・・・

夫唱婦従の天則を守り、主人によう仕へ、家の中を治めて行くのが貴女の役だよ。男女同権でも、夫婦同権でないから、それを忘れぬやうに賢妻良母の鑑を出して、三五教の光を天下に現はすのだ。広い世の中に夫となり妻となるのも深い深い因縁（定められた運命）だ、神様の御引合せだから、決して気儘を出してはいけませぬぞ。

【８／38　華燭の典】

【考察】：　初めの「女房を持れぬ因縁」とは、実は木花姫の化身である珍山彦(蚊々虎)は珍の国の守護職正鹿山津見に五月姫を娶そうとしている。自分には結婚できぬしかるべき理由（素性）があると言っているのである。又、本来夫婦になるのは四魂が一体になることであり身魂の夫婦と言うようにすでに定められたことである。

霊の因縁性来とは

大本独特の言葉と思われる言葉に「因縁性来」があります。教えの上でも重要な言葉と思います。しかし、高姫や黒姫がよく使う言葉でウラナイ教の専売特許だと揶揄される方もあるかもしれません。そこで霊界物語からこの言葉が使われている箇所を抜粋してみました。

辞書には「因縁性来」言う言葉は出てきません。因縁は前記で五種の意味がある事がわかります。また、
【性来】：　本来の性質。うまれつき
とあり、従って霊の因縁性来とは「**生まれつきその魂が持つ定められた運命又は動機や関係**（縁）」と言うことでしょうか。

▲　古の怪しき獣は、今日に比ぶれば、其数に於て其種類に於て最も夥しかつた。併しながら三五教の神の仁慈と言霊の妙用によつて、追々に浄化し、人体となつて生れ来ることとなつた。故に霊の因縁性来等に於て、今日と雖も、高下勝劣の差別を来たすこととなつたのである。併しながら何れも其根本は天御中主大神、高皇産霊神、神皇産霊神の造化三神の陰陽の水火より発生したるものなれば、宇宙一切の森羅万象は皆同根にして、何れも兄弟同様である。

　同じ人間の形体を備へ、同じ教育をうけ、同じ国に住み、同じ食物を食しながら、正邪賢愚の区別あるは、要するに霊の因縁性来のしからしむる所以である。

　或理窟屋の中には、総ての人間は同じ天帝の分霊なれば、霊の因縁性来、系統、直系、傍系などの区別ある理由なしと論ずる人がある。斯の如き論説は、只一片の道理に堕して、幽玄微妙なる霊魂の経緯を知らざる人である。人の肉体に長短肥瘠、美醜ある如く、霊魂も亦これに倣ふは自然の道理である。要するに人間の肉体は霊魂のサツクのやうなものであるから、人間各自の形体は霊魂そのものの形体であることを悟らねばならぬ。霊魂肉体を離れ、霊界に遊ぶ時は、其脱却したる肉体と同様の形体を備へ居る事は、欧米霊学者の漸く認むる所である。　【32/13 平等愛】

▲　艮金神が初発から一言申した事は一分一厘違はんぞよ。途中から変はるのは矢張り霊魂に因縁（縁）が無いのぢやぞよ。因縁のある身魂は截りても断れん、如何な辛い目をいたしても左程苦しい事は無いぞよ。因縁性来と申すものは、エライものであるぞよ。それで今度は因縁ある身魂が集りて来て、辛い辛抱をいたして、天地の光を出して呉れんならん、変性男子と変性女子との身魂を、茲まで化かして神の御役に立てるぞよ。変性男子と女子の身魂が誰も能う為ぬ辛抱をいたして、此世には神は無きものと、学で神力をないやうに仕て居りたのを、此世に神が有るか無いかといふ事を、三千世界へ天晴れと天地の神力を表はせて見せて、この先は神力の世に致すから、是からは学力で、何麼事を致しても、世の本の根本の生神の神力には敵はんから、今の中に悪神のエライ企みを砕いて了ふから、一日も早く往生（降参）いたすが得であるぞよ。【60/23　三五神諭その四】

▲自分は数多の人に接してより、第一にこの霊衣《心霊学におけるオーラに相当すると考えられる》の厚薄を調べてみるが、信仰の徳によつて漸次にその厚みを加へ、身体ますます強壮になつた人もあり、また神に反対したり、人の妨害をしたりなどして、天授の霊衣を薄くし、中には円相がやや山形に変化しつつある人も沢山実見した。自分はさういふ人にむかつて、色々と親切に信仰の道を説いた。されどそんな人にかぎつて神の道を疑ひ、かへつて親切に思つて忠告すると心をひがまし、逆にとつて大反対をするのが多いものである。これを思へばどうしても霊魂の因縁性来といふものは、如何ともすることが出来ないものとつくづく思ひます。【２／総説】

▲『神は万物普遍の霊にして人は天地経綸の司宰者なり』
と断定を下して居るのである。これも出口教祖の廿七年間の筆先の大精神を通観して得た所の断案である。斯くの如く尊き天地経綸の司宰者たる人間にも、亦善悪美醜大小強弱の区別があつて、中には天地経綸の司宰者どころか、却て天地経綸の妨害をなす人間が沢山に出来て居る。斯くの如き人間が現はれて来るのは、要するに一つは教育の如何にもよるのは無論だが、真の原因は決してさうでは無い。肝賢の大原因は天賦《生れつき。天性》の力徳の過不及《過不足》による処の結果で、お筆先の所謂身魂の因縁性来によるものである。概して人間の肉体の善悪強弱は、凡て力徳の過不及により生ずる所の結果である。人の心の善悪智愚は元より教育によつて其一部分は左右せらるるものである。然し人は神様に次での尊きもので、世界を善に進め美に開くべき天職を天賦的に持つて居るものである。人間は小なる神として又神の生宮として此世に生れ出でたる以上は、終生神の御旨《目的》を奉戴《つつしんでいただく》し天地の御用を助け奉らねば、人と生れ出でたる本分が尽せないのである。人間は裸体で生れて来たのであるから、又裸体で死ねば宜いと云ふ様な棄鉢根性では、人生天賦の職責《職務上の責任》が遂げられぬのみならず、折角神界より選まれて神の生宮として世に生れさして頂いた、大神の御聖旨に背く罪人となるのである。　【38/1　道すがら】

終わりにウラナイ教の因縁性来を

▲黒姫『サア、これから日の出神様のお筆先を頂くから聞きなされ、・・・・
筆先『変性男子の系統の御身魂、日の出の神の生宮、常世姫命と現はれて、高姫の肉体を藉りて、三千世界の世の初まりの、根本の根本の、身魂の因縁性来から、大先祖がどう成つて居ると云ふ事を明白に説いて聞かす筆先であるぞよ。変性男子は経の御役、誠生粋の正真の大和魂、一分一厘違へられぬ御役であるぞよ。毛筋の横巾も変性男子の系統の肉体に憑つて書いた事は間違ひは無いぞよ。三千世界の大立替大立直しの根本の結構な御筆先であるぞよ。変性女子の身魂は緯の御用であるぞよ。緯はサトクが落ちたり、糸が切れたり、色々と致すから当にならぬ悪のやり方であるから、変性女子の書いた筆先も、申す事も、行状も真実に致すでないぞよ。一つ一つ審神を致さねば、ドエライ目に会はされるぞよ。女子の御役は悪役で、気の毒な御用であるぞよ。身魂の因縁性来で、善と思うて致す事が皆悪になるぞよ。善にも強い悪にも強い常世姫の筆先、耳を浚へて確り聞いて下されよ。毛筋も違はぬ誠一つの、生粋の大和魂の、日の出神の生宮の常世姫命の性来、金毛九尾の悪神を、一旦キユウと腹に締め込みて改心させる御役であるぞよ。・・・・・・女子の身魂は此世の紊れた遣り方を見せるお役、天の岩戸を閉める御苦労なかけ替への無い身魂であるぞよ。これも身魂の因縁性来で、昔の因縁が廻つて来たのであるから、神を恨めて下さるなよ。・・・・』と厳の御魂の筆先の抜萃した高姫の書いた神諭を、声高々と読み聞かして居る。
【17/10　四百種病】

素盞嗚尊のお働き（古事記の意味するところ）

古事記において、素盞嗚尊が母の国へ行こうとされ、天の岩戸隠れから大蛇退治までの一連のお話は何を意味しているのでしょうか。若い頃初めて古事記を読んだとき、天照大神が武装を整えて素盞嗚尊を迎える場面がありますが、神様であれば当然素盞嗚尊の心は分かっているはずなのに、どうして疑いの気持ちを持たれたのか不思議に思いました。また数年前に素尊が直接母の国に行かないで、なぜ高天原の姉大神の処に寄って行こうとされたのか不思議に感ぜられました。

〇素盞嗚尊は何故母の国へ行こうとされたのか

古事記によると素尊は大海原の国を治めきれないとして母の国へ行こうとされます。大変無責任な行為です。そこで父大神の伊邪那岐命は怒って地上世界に住むなとして、母の国に行くことを許します。この事は何を意味するのでしょうか。

結論的に云えば、素尊は大海原（地球）の主宰神であり、現代風に云えば総理大臣でありますが荒ぶる神が世を乱し、世を治めかねています。総理大臣という立場は、高いところから世を治めようとして命令を下す立場ですが、多くの神はそれに従いません。神人の心は荒んで行き、体主霊従（われよし）の大気津姫化した社会となりこのまま行けばますます悪くなるばかりです。そこで、母の国に行きたいと申されたのは一切の地位や財産を抛（なげう）って、素尊が野に下って直接自らの身をもって世直しをされると云うことであると思います。（また、この事は天地剖判の折から約束されたことだと思います。）

十一巻第二四章〔顕国の宮〕ではその準備をされておられます。

茲に神須佐之男命は地教の山を後にして顕国の宮に入らせ給ひ、天之目一箇神をして十握の剣を鍛へしめ顕国の宮の神実となし、天下の曲神を掃蕩すべく天之児屋根命、太玉命をして昼夜祭祀の道に鞅掌（あうしゃう）《いそがしく働いて暇のないこと》せしめ給ひぬ。神須佐之男大神は十握の剣を数多作り供へて、曲神の襲来に備へむため天之目一箇神をアルプス山に遣はし、鋼鉄を掘らしめ数多の武器を作る事を命じ給へり。アルプス山はウラル彦、ウラル姫の一派の武器製造の原料を需（もと）めつつありし重要の鉱山なりき。これより天之目一箇神は竹野姫と共にアルプス山に向ふ事となり、淤縢山津見神、正鹿山津見神、月雪花の宣伝使はアーメニヤの神都に向つて魔神を征服すべく、神須佐之男大神の命を奉じてアーメニヤに向ひける。又アルプス山には石凝姥神を添へて、天之目一箇神、竹野姫と共に銅鉄を需めしむべく出発せしめ給ひける。

此事忽ち天上に在す天照皇大神の御疑ひを懐かせ給ふ種となり、遂に須佐之男命は、姉神に嫌疑を受け神追ひに追はれ給ふ悲境に陥り給ひたるなり。

傍線部分は御自分が神追ひに追はれ給ふた後の事を考えてのことでありましょう。また二重傍線は聖師が大本事件を起こさせるような行動を自ら取った事と類似しています。

素盞嗚尊が父大神の許しを得て高天原に上られますが、その時、八十猛の神が付き随ってゆきます。

素盞嗚尊に従ひませる八十猛の神々は大に怒りて、『吾（あ）が仕へ奉る素盞嗚大神は清明無垢の瑞霊（づいれい）に坐（ま）しませり。然（しか）るに何を以て吾が大神に対し、黒（きたな）き心ありと宣らせ給ひしか』

と怒り狂ひて、遂に姉大神をして天の岩戸に隠れ給ふの已（や）むなきに到らしめたのは、実に素盞嗚尊の為には惜（を）しむべき事である。（霊界物語第二二巻　第一章　玉騒疑）

高天原では天照大神様が、武装を整えて素尊を迎えます。ここで何故素尊が高天原を占領すると思われたかと言えば、付き添って来た八十猛の神がおそらく武装していたのでしょう（古事記本文では素尊お一柱の仕業のように書

いてありますが）。本来姉大神様にご挨拶するだけなら、僅かなお供だけでよいはずです。それが占領されると誤解を生むほど大勢が付いてきたのは何故でしょうか。ここに付いて来た神人は素尊の神政に反対する者たちでしょう。あわよくば高天原を占領し、そう行かなくとも素尊を陥れ邪魔をする目的で付いて来た連中です。その証拠に黒姫が素盞嗚尊は何も悪くないが自分たちが素尊を陥れるために騒いだと証言しています。

〔再びこの世に出てこぬやうにいたすのがウラナイ教の御宗旨だ。せつかく今まで骨を折つて、天の岩戸隠れの騒動がおつ始まるところまで旨く漕ぎつけ、心地よや素盞嗚尊は罪もないのに高天原を放逐され、今は淋しき流浪の一人旅、奴乞食のようになつて、翼剥がれし裸鳥、これから吾々の天下だ〕（第十五巻第十八章）　素尊がお伴を許した連中は悪神であり、善神かどうかを立て分ける為に許したのではないでしょうか。

次に契約をし、身の潔白を証明します。何故三女神、五男神なのか、たんに瑞の霊、厳の霊と言うだけでは無いように思われますが、今の私には分かりません。そして、八十猛の神が田の畦や溝を壊し大暴れし、ついに天照大神様が天岩戸にお隠れになります。聖師は言霊解（十二巻三〇章）で岩戸隠れとは辞職することだとお示しになっています。そして再び天岩戸が開きます。即ち御復権になられるわけです。岩戸隠れにより天界は暗がりの夜となり、悪魔が横行し（政治経済、教育等全てが行き詰まってゆき）ます。そこで岩戸開きまでの間に思兼の神（大地の神霊）を中心に会議が行われ様々な行事が行われます。この一連の行事は今後の大海原（地球）の世界の行く末をお示しになっているのだと思います。それは、天界での型と考えられます。そしてその型が素尊の現界でのお働きと成って行くのだと思います。

素尊はこれまで神司が犯して来た罪を贖う神であると同時に、地球（顕界）を救う神でもあります。顕の顕の世界、即ち我々が住む現界を主宰し給う神であります。その意味でも我々が最も恵み幸はいをいただく神と言えます。

素尊が千座の置き戸を負うと言うことは、顕界のこれまで神司が犯して来た罪穢れを一身に背負い、贖う神であることは勿論ですが、それで終わった訳ではありません。初めに書いたように、五六七の神業を直接身を以て行われたのです。古事記では八岐大蛇を退治し、物語では地教山に母神伊邪那美命の神示を受けチベットに赴き、ついに産土山の斎館では多くの宣伝使を養成します。また、五六七とは六六六から天の丶が地に下ったことを意味します。霊系イザナミの大神が素盞嗚尊と身を降し、地上（物質）世界の修理固成のために降られたと言うことではないでしょうか。

『ヤヨ、愛らしき素盞嗚尊よ、妾は汝が母伊邪冊命なるぞ、汝が心の清き事は高天原に日月の如く照り輝けり。さりながら大八洲国になり出づる、数多の神人の罪汚れを救ふは汝の天賦の職責なれば、千座の置戸を負ひて洽く世界を遍歴し、所在艱難辛苦を嘗め、天地に蟠まる鬼、大蛇、悪狐、醜女、曲津見の心を清め、善を助け悪を和め、八岐の大蛇を十握の剣をもって切りはふり、彼が所持せる叢雲の剣を得て天教山に坐し在す天照大神に奉るまでは、唯今限り妾は汝が母に非ず、汝又妾が子に非ず、片時も早く当山を去れよ、再び汝に会ふ事あらむ、曲津の猛び狂ふ葦原の国、随分心を配らせられよ』　・・・

素尊『・・・いざ之より汝と吾とは生の兄弟となりて大八洲の国に蟠まる悪魔を滅ぼし、万民を救ひ天下に吾等が至誠を現はさむ、鬼掴来れ』（第一五巻第十二章）

この事を裏付けるものに以下のように示されています。

古事記本文は『於是、八百万の神共に議りて、速須佐之男命に千位の置戸を負はせ、亦鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて、神追ひに追ひき』とあります。

第十一巻、第三篇　言霊解では

ここでの「千位の置戸を負はせ」は「凡て万神万有の一切の罪科を一身に負担して、自ら罪人となつて、天地の神明へ潔白なる心性を表示されたのであります。斯の温順善美なる命の御精霊を称して瑞の御魂と謂ふのである。」とあります。

「亦鬚を切り、」は辞職であり、「斯の如き人は至忠思君思国の日本魂を振起して、公然大本の信者と名乗り、現代の高い位地なり、名望を眼中に置かず、止むを得ざれば現位地を擲つて、天下国家の為に、大本の主義を天下に実行する様になつた時が、所謂鬚を切つて、真個神明と大君と社会とに奉仕の出来る時であります。」とあり。

「手足の爪をも抜かしめて」とは「一切の財産を顧みず、物質的慾望を捨てて神明の道を天下に宣伝する事」とあります。

素尊が高天原を「神追ひに追ひき」は単に追放になったのではなく、　「物質的慾望を捨てて神明の道を天下に宣伝する事が神追ひに追ひきと云う事になるのである。・・・ 故に神追ひは、神様を追放したり、退去させたりすると云ふ意義では無い。追《あとをおうこと。おいかけること》の漢字と退《もどること。しりぞくこと》の漢字の区別ある事を能く反省すべきである。この点は古事記撰録者の最も意を用ゐたる点にして、実に其の親切と周到なる注意とは感謝すべき事であります。」　とあります。

第八巻 第１１章「海の竜宮」では　正鹿山津見『御推量に違はず、われは聖地エルサレムに於て、暫し天使長の職を勤め遂には吾が身の失敗のために、国祖国治立大神に累を及ぼし、八百万の神人に神退ひに退はれ、根の国、底の国に落ち行かむとする時しも、慈愛深き高照姫神に救はれ、今は竜宮城の門番を勤むる卑しき身の上、・・・』と退の字が使われています。

即ち「追」の字はポジティブであり、「退」字はネガティブであります。素尊は神人により追放されたのではなく、積極的にご自身から五六七の神業のため地位を抛たれたのです。　《 》内は筆者注

それは

第１５巻第１０章「神楽舞」には　「ここに八百万の神は此度の事変を以て神素盞嗚尊の罪に帰し、手足の爪まで抜き取りて、高天原を神退ひに退ひ給ひしなり。是より神素盞嗚大神は、今迄海原の主宰神たる顕要の地位を棄て、心も細き一人旅、国の八十国、島の八十島にわだかまり、世人を損ふ八岐大蛇の悪神や、金狐、悪鬼の征服に向はせ給ひける。嗚呼、今後の素盞嗚大神の御身、は如何になり行くならむか。」

と自ら顕要の地位を棄て、悪神の征服に向かうと目的がはっきり書かれている。

また

先の母神伊邪冊命の素尊への御言宣にあり、更に三〇巻には悪の張本とも言える八岐の大蛇を退治する事が尊の御神務とはっきりと目的が書かれています。

捨子『素盞嗚尊様は八岐の大蛇を退治の為、世界中を御廻り遊ばす御神務、就いてはお一人にては此広い世界、お手が廻らないから、自分のいたいけな御娘子を、世界へお遣はし遊ばす御経綸を惟神的に御始めなさつて居られるのですから、・・・』

また、

・・・・・・　　の御霊と現れませる
神素盞嗚大神は　　豊葦原の国中に
さやれる八岐の大蛇をば　　誠の剣抜き持たし
恵の玉を光らせて　　大蛇の霊を悉く
服従ひ和し玉ふなり　　・・・・・・　　霊界物語三〇巻　第二章「乾の滝」）

何故素尊が高天原の姉大神に会いに行かれたのか、様々な理由の外に次のような理由もあると思います。物語によると詳細に報告に行かれたとあります。おそらく私の推理では、素尊が追放された後の世界を姉大神に託されたのではないでしょうか。その結果が天孫降臨となり，現在の皇室へと繋がってくるのだと思います。今後ミロクの世が実現した暁には、再び素尊がこの地球（現界）を治められることになります。そして、現代の須佐之

男命は出口聖師であり、その子孫出口家が正当な世継ぎであると思います。聖師が何故有栖川家の御落胤である必要があったのか。それは、天照大神から素盞嗚尊へ政権をお返しになる型ではないでしょうか。唯ここで誤解の無いようにしたいのは、出口家がこの日本（世界）を統治されるのではなく，政教分離によって主神の教えによる精神世界を治められると言う事です。即ち政治、経済等あらゆる分野の上に立って指導される立場になると言う事ではないでしょうか。

親子、夫婦、師弟の関係

第８巻　第３５章　「一二三世」には親子、夫婦、師弟の関係が、木花姫の化身である蚊々虎によって面白く語られている。

『ままになるなら此涼風を、母の土産にして見たい』
駒山彦『オイ、蚊々虎、殊勝らしい事を云ふね。「ままになるなら此涼風を母の土産にして見たい」随分孝行者だなア。夫れほど親孝行の貴様が放蕩ばかりやりよつて、両親に心配をかけ、子が無うて泣く親は無いが、子のために泣く親は沢山あるとか云つてな、ソンナ優しい心があるのなら何故親を放つたらかして其辺中を迂路つき廻るのだ。口と心と行ひと一致せぬのは、神様に対してお気障りだぞ』
蚊々虎『人間の性は善だ。誰だつて親を思はぬ子があらうか。浮世の波に漂はされて止むを得ず、親子は四方に泣き別れと云ふ悲惨の幕が下りたのだよ。親子は一世、夫婦は二世、主従は三世と云ふ相なからのう』

●親子の関係
蚊々虎はしたり顔にて、
『オイ、駒、貴様わけのわからぬ奴だナ。俺がいま宣伝してやるから尊い御説教を謹聴《つつしんでよく聞くこと》しろよ。親子一世と云ふ事は、何ほど貴様の様な極道息子の親泣かせでも、親が愛想をつかしてモウ之つきり親の門口は跨げる事はならぬ。七生までの勘当だと云つた処で、矢張り親子は親子だ。お前が俺に勘当するなら勘当するでよい、又外に親を持ちますと云つた処で生んで呉れた親は矢張り一つだ。親子は一世と云ふ事は、泣いても笑つても立つても転んでも一度より無いのだ。それだから親子は一世と云ふのだ。断つても断れぬ親子の縁だよ。貴様の考へは大方生てる間は親子だが、死んで仕舞へば親でも無い子でもない、赤の他人だと云ふ論法だらう。ソンナ訳の分らぬ事で宣伝使が勤まるか』
『故郷の空打眺め思ふかな、国に残せし親は如何にと』

●夫婦の関係
蚊々虎『エーイ、喧しい、俺のお株を取つて仕舞ひよつて、能うベラベラと燕の親方の様に喋る奴だナ。この蚊々虎さまの説教を謹んで聴聞《聞くこと》いたせ。夫婦は二世と云ふ事は、貴様の考へてる様な意味で無い。夫婦と云ふものは陰と陽だ。「鳴り鳴りてなり余れる処一処あり、鳴り鳴りてなり合はざる処一処あり、汝が身の成り余れる処を我身の成り合はざる処に、さしふたぎて御子生んは如何に」と宣り給へば「しかよけむ」と応答し給ひきと云ふ事を知つてるかい。夫婦と云ふものは世の初めだ。誰の家庭にも夫婦が無ければ、円満なホームは作れないのだ。さうして子を生むのだよ。其子がまた親を生むのだ』
『オツト待て待て、脱線するな。親から子が生れると云ふ事はあるが、子が親を生むと云ふ事が何処にあるかい』
『貴様、分らぬ奴だな。男と女と家庭を作つたのは夫は夫婦だ。そこへ夫婦の息が合つて「オギヤ」と生れたのだ。生れたのが即ち子だ。子が出来たから親と云ふ名がついたのだ。子の無い夫婦は親でも、何でもありやしない。此位の道理が分らないで宣伝使になれるかい。さうして不幸にして夫が死ぬとか、女房が夭折《わかじに》するとかやつて見よ。子が出来てからならまだしもだが、子が無い間に女房に先だたれて仕舞へば、天地創造の神業の

御子生みが出来ぬでは無いか。人間は男女の息を合して、天の星の数ほど此地の上に人を生み足はして、神様の御用を助けるのだ。そこで寡夫《妻に死別した男》となつたり寡婦となつたり、其神業が勤まらぬから、第二世の夫なり妻を娶るのだ。之を二世の妻と云ふのだい。貴様の様に此世で十分イチヤついて、又幽世に行つてからもイチヤつかうと云ふ様な狡猾い考へとはチト違ふぞ。さうして二世の妻が、又もや不幸にして中途で子が出来ずに先に死んで仕舞つたら、夫はもう天命だと諦めるのだ。三回も妻を持つと云ふ事は、神界の天則に違反するものだ。それで已を得ざれば、二人目の妻までは是非なし、と云つて神様が御許し下さるのだ。其を夫婦は二世と云ふのだよ。あゝあ一人の宣伝使を拵へ様と思へば骨の折れる事だ、肩も腕もメキメキするワイ』

●師弟の関係

『家来で無いもあつたものかい、誰が貴様の家来になつたのだ。ソンナ法螺を吹かずに主従は三世の因縁を聞かして下さらぬかイ』

蚊々虎『下さらぬかなら、云うてやらう。人に物を教へて貰ふ時には矢張り謙遜るものだ。**からだ**に徳をつけて貰ふのだからな。オホン、主従三世と云ふ事は、例へて云へば此蚊々虎さまは、もとは此処にござる淤縢山津見様が醜国別と云うて悪い事計りやつて居る時に俺が家来であつた。然しコンナ主人に仕へて居つては行末恐ろしいと思つたものだから、如何かして暇を呉れて与らうと思うたのだ。さうした処がネツカラ良い主人が見つからぬのだ。探してゐる矢先に日の出神と云ふ立派な宣伝使が現はれたのだ。それで此方さまは、第二世の御主人日の出神にお仕へ申して居るのだ。さうして淤縢山さまは、蚊々虎々々々と云つて家来扱ひをされても、俺の心は五文と五文だ。その代り一旦主人ときめた日の出神の前に行つた位なら、ドンナ者だい。臣節《人臣の守るべき節操》を良く守り、万一日の出神様が俺の見当違ひで悪神であつたと気がついた時は、其時こそ弊履を捨つるが如くに主人に暇を与るのだ。さうして又適当な主人を探して、それに仕へるのだ。それを三世の主従と云ふのだよ。三代目の主人は醜国別よりも、もつともつと悪い奴でも、もう代へる事は出来ない。そこになつたら、アヽ惟神だ、因縁だと度胸を据ゑて、一代主人と仰ぐのだ。三回まで主人を代へ、師匠を代へるのは、止むを得ない場合は神様は許して下さるが、其以上は所謂天則違反だ。主従四世と云ふ事はならぬから「主従は三度まで代へても止むを得ず」と云ふ神様が限度をお定めになつて居るのだよ。どうだ、駒、俺が噛んでくくめるやうな御説教が、腸にしみこみたか、シユジユと音がして浸み込むだらう。賛成したか、それで主従三世だよ』

一同は声を揃へて、『アハヽヽヽ、オホヽヽヽ』

掃 除 の 仕 方

現代は掃除をする機器が様々にあり掃除はさして苦にはならぬが、其の分、暮れの大掃除などは日頃の手抜きが身につき若い人など、効率よく出来ないのではないでしょうか。

霊界物語第五五巻に出てくる掃除や料理の下ごしらいの方法は核家族化した今日、親から子に伝えられることが無く、お金を出して他人に教わるという社会現象を引き起こしています。

ここに出てくることは時代遅れと笑う人もいるかも知れませんが、まだまだ社会は安定していません。オール電化といったエネルギーの単一化はまだ早いように思います。絶対に電気は止まら無いとはいいきれません、複数のエネルギーを利用することが必要であり、地震のような災害があればキャンプやサバイバルのような生活を余儀なくされます。昔の智慧ともいうべき生活もまた大切です。

さて、五六七の世は決して今日の吾々が日頃行っている、贅沢で無駄を何とも思わす、身体を動かさずに便利という名の下に自動化されなんでも器械に頼る生活とは違い、ちょうど、昭和３０～４０年代のような生活に充実感のある社会ではないでしょうか。

第５５巻 第５章 「飯(めし)の灰(はひ)」

に其の掃除の基本が載っています。晦日の大掃除などに参考になるのではないでしょうか。

万公(まんこう)『サ、先づ座敷の掃除からやるのだ。オイ、フエル、ベツトの両人、随分広い間だから一寸骨が折れるぞ。骨折ると云つても障子の骨折つちや、忽(たちま)ち幾分かの損害だから、充分注意をして貰はねばならぬ、先づ掃除の仕方から教へてやらう、……一番に戸障子を開け放つて了(しま)ひ、どうしても動かす事の出来ぬ大切な品物は被物(おほひ)をかけておくのだ。それから払塵(はたき)のかけ方は天井のスミズミから戸障子腰張りといふ順序に、上からダンダンと払塵の先で品よくハタくやうにするのだ。一寸今俺が標本を見せてやる……コレ此通りだ。腕をニユツと伸ばし、手首を下向けるやうにしてやりさへすれば、桟(さん)に柄(え)が当らず、埃(ほこり)は甘(うま)く散つて了ふ。ハタキが済むと今度は箒を使ふのだ』

フエル『ハイ有難う、箒使ふ位はよく知つてゐます。オイ、ベツト、汝(きさま)も此箒を以て掃くのだ』

と云(い)ひ乍(ながら)ら両人は一生懸命に畳を掃き出した。

万公『コラコラそんな掃き様があるか。箒の使方は畳の目に添うて掃かないと、塵がスツカリ畳の中へ入つて了ふぢやないか、汝(きさま)のやうに箒の先を上げよつて使ひよると、埃がそこらへ飛びさがして、箒は損(いた)むなり、又元の障子の桟へ止まつて了ふぢやないか。そんな中央の方斗(はうばか)り掃いたつて何になる、隅々をよく掃きさへすれば、中央は独り美しうなるのだ。そして掃掃除が済んだら、箒を吊つておくのだ、立てておくと、すぐに薙刀(なぎなた)の穂先のやうに曲つて了ふぞ。掃除がスツカリすんだ後は、先に付いてをる塵(ちり)を除(と)つておくのだ』

フエル『モシ、御主人様(ごしゆじんさま)、随分貴方(ずいぶんあなた)は能(よ)う気がつきますな、丸で女みた様ですワ』

万公『きまつた事だ、変性女子(へんじやうにより)の瑞霊(みづのみたま)だ、サ、之から水の御用だ。箒がすんだら、雑巾がけをやるのだ。雑巾は能く水につけ揉み出して、可(か)なり固く絞り、力を入れて拭かないと、却(かへつ)て縁板(えんいた)が汚(きたな)くなるぞ。バケツの水も度々(たびたび)取替へぬと駄目だ。雑巾のかけ方は板の目に添うて、雑巾をよく折返して拭くのだよ。椽(えん)の隅は雑巾を三角形に折つて拭くと、スミ迄綺麗になる。ニス、漆(うるし)の上等の材木などは、湿つた雑巾をかけては却(かへつ)て悪くなるものだ。乾いた雑巾を根(こん)に任(まか)して使ふのだ。朝晩の拭掃除も門掃も硝子研(がらすみが)きも、雑巾掛も皆人格の修養だ、そして社会奉仕の一つだ。あああ主人になつても、並や大抵の事ぢやないわい。コリヤコリヤ、バケツの水が

汚れてゐるぢやないか、なぜ新しいのと汲み替へぬのだ。そんな泥のやうな水で雑巾を絞るものだから、これみい、板の間に白い筋がついてるぞ』・・・・・・・・・・・・

万公『ヤア此奴ア飯だ、……此奴ア副食物だ、……コリヤコリヤお民、飯が煮え立つた後は、火をズーツと弱めるのだぞ。そして白い泡を外へこぼさない様にするのだ、米の甘味がスツカリ帰(い)んで了(しま)ふからな。火を焚く時には仕事の手順を考へて、ズツと続けて用ふる方が、火力の経済となるから、汝(きさま)のやうに一遍に冷たい竈をぬくめようとすると、大変な損だぞ。余つた火を次へ廻しまわしすれば、何程経済上利益かも知れぬ。火を焚く時はよく調節して、炎の先が鍋の底に当る程度のものにしておけば、それ以上外へ火がねぶる様な事では焚物が無駄になる。オイ、フエル、ベツト、汝(きさま)も俺の云ふ事をよう聞いておけ。第一テームス家の損になる事だからな。奉公人根性と云つて、主人の居らぬ時にや、不経済な事許りしよるから、今までとはチツと違うぞ。今度の主人は経済学者だからなア』

お民『ホホホホ主人が鍋の蓋をあけて調べる様になつたら、最早其家は駄目ですよ。余程家の財政が苦しいとみえますなア』

万公『馬鹿云ふな、冥加(みやうが)と云(い)ふ事を知らんか。オイ、ベツト、フエル、お前はこれからお客が多いのだから、お民の仕事を手伝つてやつてくれ。第一経済を重んじて、薪や炭を粗末にせない様に頼むぞ。よく乾いた薪(たきぎ)を用ゐ、無暗(むやみ)に沢山釜の下へ捻ぢ込むと、却(かへつ)て燃えが悪く、燻(くすぶ)つて了(しま)ふ。割木なら、太い奴を四本位くべるのだ。そして薪と薪とが重ならぬやうに組合さないと、燃えにくいぞ。そして物が煮え上つたら、使ひさしの薪はすぐに消すのだ。火消壺(ひけしつぼ)へつつ込むか水をかけるかしてなア……』

第６章「洗濯使(せんたくし)」

万公『オイお民、火消壺の蓋は何時もキチンと出来てるか、底の方に火がまわりはせぬかと能く気をつけるのだぞ。コンロの下の灰を一遍々々捨てる事を忘れるな。井戸の水はどんなとこへ使へば危険でないか。煮物、炊物、沸かして呑む水等の外、決して生水は呑んでは可かぬぞ。此頃は梅雨だから、水に塩気があつて、妙な黴菌(ばいきん)が生(わ)いてゐるから充分に沸らして、水が呑みたけりや冷して呑め、生水を使ふのは手洗水か雑巾水より外にはならぬぞ』

お民『流しを洗うたり、食器類や俎板(まないた)を洗ふのは何うしたら可いのですか。ヤツパリ之も湯を沸かすのですか』

万公『エー、そんな事迄指図せなくちや分らぬのかナ、其奴(そいつ)ア水で辛抱するのだ。そして水壺に何時も水を用意して、非常の時の用意に備へておくのだ。そして毎日新しい水と取かへるのだぞ。柄杓(ひしやく)などを水の中へつけておくと、水の味もかわるし、杓(しやく)もホトびて損(いた)むから、一遍々々外へ出して乾かしておくのだよ。そして井戸は使つたあとは蓋をしておくのだ。釣瓶縄(つるべなは)の新しいのを使う時は、ようスゴいて使はないと、クロロを脱線するから気(き)をつけよ』

お民『贋旦那(にせだんな)さま、指図計りして居らずと、貴方も一つ手伝うて下さいナ。ここは井戸ぢやありませぬよ。水道の水を使つて居るのですよ』

万公『水道でも井戸でも同じ事だ。麻病(りんびやう)やみが小便をたれるやうに、いつもジョウジョウと洩(もら)しておいては公徳上すまないから、水道の栓は、使つたら固く締めておくのだ。そして朝水道の水はバケツに一杯丈は使水とし、余りは滌(すす)ぎ水にして外(ほか)へ利用するのだ。お水を粗末にすると、月の大神さまの神罰が当るぞ』

万公『エー、お上(かみ)の事が下(しも)に分るものかい。サア是から洗濯だ。洗濯の仕方は分つとるかなア』　・・・・

お民『洗濯と云つたら、河へ持つて行つて、浅瀬に石を一々乗せて、漬けておけば可いのでせう。そして十日程して行けば自然に垢(あか)が除(と)れてますワ。万公さま、ここに古い褌(まわし)や湯巻(ゆまき)の古手が沢山つつ込んであるから、お前さま抱えて猪倉川迄持つて来て下さらぬか』

万公『馬鹿云ふな、主人候補者の俺に向つて、チツと失礼ぢやないか。ここの背戸口で盥に水や湯を汲んでバサバサとやれば可いのだ。【きめ】の粗い水だとみた時は、始めに曹達を能く溶かして使へばキツト美しうおちる、さうすると石鹸と時間とが経済になる。そして滌ぎ水は奇麗に濁らなくなる迄何遍も変へないといふと、生地が早くいたむぞ。そして水で洗うて可いものと、湯で洗うて可いものとある。それを第一心得ておかないと洗濯婆にはなれぬぞ。俺は世界の人民の霊を洗濯する三五教の洗濯使だ。併し乍ら今日は譲歩して、汝に衣類の洗濯方法を教てやるのだから、能く忘れぬやうに覚えておけ。洗ひ方に注意せないと、折角の結構な衣類が台無しになつて了ふものだ。絹物や毛織物や色物は熱い湯につけて洗うと駄目だ。又毛織物は冷たい水に漬けても悪い。そして絹物、毛織物、麻織物は強く揉んでは駄目だぞ。曹達（灰汁）や悪い石鹸で、絹物はキツと洗つてはならない、色物は猶更だ。そして色物は皆陰干にせなくては、日向に出したら皆色が褪せて了ふ。干す時は竿か縄を通して、木から木へ掛けておくのだ。白い物を色物の竿にかけると、色がついて台なしになつて了ふぞ。あああ宣伝使も何から何迄知つてをらねば勤まらぬ、本当に難しい職掌だなア』

お民『ハハア、さうするとお前さまは若い時から洗濯屋の番頭をして居つたのだなア。男の癖にそんな事を知つて居るものは、首陀の内だつてありませぬワ。モウ余り喋りなさるな、お里が見えると、折角の縁談もフイになりますよ。ホツホホホホ』

万公『馬鹿云ふな、女子大学家政科の卒業生だ。それだから何もかも知つてるのだ』

お民『ホホホホ、女子大学へ男が行くのですか。さうするとお前さまは男の腐つた女の屑だな。道理でクヅクヅ云うと思つてゐた』

万公『女は口を慎むが第一だ。男子に抗弁するといふ事が何処にあるか、らしうせよといふ言を知つてゐるか』

お民『其位のこた、とうの昔に御存じのお民ですよ。主人は主人らしう、奴は奴らしう、下女は下女らしう、宣伝使は宣伝使らしう、居候は居候らしうせよと云ふ事でせうがな。お前さまも若主人なら、なぜ若主人らしうせぬのだい。私が一寸考へてみると、お前さまは、馬鹿らしう、ケレ又らしう、自惚男らしう、腰抜らしう、デレ助らしう、雲雀らしう、九官鳥らしう、まだも違うたら鸚鵡らしうみえますよ、ホツホホホホ』

アヅモス『へーエ、妙ですな。貴方何時の間にここの主人になられましたか』

万公『遠き神代の昔から、霊の因縁でここの主人ときまつて居るのだ。俺は今の主人の父親のテームスの生れ変りだぞ』

アヅモス『へーエ、貴方のお年は、一寸見た所で四十近いぢやありませぬか、御主人のお父さまは亡くなつてから、まだ五六年よりなりませぬがな』

万公『其モ一つ親だ、親と云つたら先祖をすべて親といふのだ。それで遠津御祖代々の親等と祝詞にもいうてあるぢやないか。祖父さまだの、曾祖父さまだのと、人間は云ふか知らぬが、神の方では一口に親と云へば、それで可いのだ。ゴテゴテ言はずに、お民に飯の炊方から洗濯の方法まで教へてあるから、能く聞いて早く膳部を拵へ、珍客さまを待遇すやうに致さぬか』

第８章「放　棄」

お民『エエ八釜しい番頭ぢやな。お前さまは何処でボーイでもやつて居たのかな、好うこせこせと釜の下までゴテづく吝嗇坊だなア』

アヅモス『別に構ひたい事は無いけれど、余り貴様が分らぬから、一応料理法を教へて置くのだ。総て小鳥や魚を串にさして焼く時は火を遠くし、そして強火にした方が、美味しう焼けるものだ。魚は身の方から、小鳥は皮の方から焼くのだよ。昔から魚身鳥皮といふからなア、充分焼いてから裏がへさないと不味なる。さうして網

や串の焼けた後で肉を載せるのだ。それから煮る時には醤油や水を十分煮立たして置いて、其後に入れないと甘い汁が出て仕舞ふのだ。野菜は真青に茹るには湯に塩を少し入れて蓋をせずに茹ると其儘の色を保つて居る。さうして茹つたら直冷たい水に入れるのだ。牛蒡や、蕗や、筍や、百合根等の灰汁の強いものは一たん湯掻いてから煮くのだ。さうして使うた道具はいつも定つた場所へキチンと置いて置くのだ、清潔に磨いて元の所へちやんと戻して置かぬとまさかの時に間に合はぬぞ。棚の上に塵が溜つて居るか居らぬかそれも考へて網や串や、薄鍋を置いて置くのだ。そして余つた食物は蠅不入に入れるか、布巾をかけて置くのだぞ』

お民『エエ矢釜しい、お前さまは土方の飯焚きでも仕て居たのだらう。余り喋るとお里が見えますぞや』

アヅモス『これやお民、土方の飯焚きとは何だ。女と思うて容赦をすれば何を吐すか分つたものぢやない、不調法しておきやがつて何を口答へをするのぢや、これでも一家の総理大臣だぞ』

お民『ホホホホ。総理大臣なんて尻が呆れますわい。当家の総理大臣はシーナさまぢやありませぬか、お前さまは二の番頭だ。そこらの隅くたを掃除大臣だ。ごたごた云はずと箒なともつて次の間を掃いて来なさい。万公山が破裂して大変な灰が降つて居ますぞよ。箒を使つたらチヤンと釘にかけて置くのですよ。其処辺に立てて置くと箒の先がサツパリ薙刀のやうになつて仕舞ひますぞや。そしてハタキは手首を下げて、天井裏から障子の桟と上から下へパタパタとはたくのですよ。どうしても動かせない道具は被物をしておいて隅から掃いて来るのです。そして畳の目に逆らうと、塵埃が皆畳の目に滲んで仕舞ひますよ。箒の先を跳ねんやうにしてソツソツと掃くのですよ、それが済んだら椽側の掃除をしなさい。雑巾を緩う堅う絞つて、板の目なりに力を入れて拭くのだよ。角の所は雑巾を三角にして拭けば綺麗になりますわ。夫からニス、漆や、桧の柱は乾布巾で念入れに拭くのですよ。きつと濡れた雑巾で拭いてはなりませぬぞえ』・・・・

お民『まアまア今日は辛抱して下さいませ、親方や娘さまが心配なさいますからな』

アーシス『ウンそれもさうだ。そんならお前の意見に従つて今日は忘れる事にせう。併しお前も此家へ来たらチツと言葉を改めて呉れぬと困るよ。御主人様を親方と云つたり、お嬢様の名を呼んだりすると云ふ事があるか』

お民『そんなら何と云つたらよいのですか』

アーシス『お上の方をお呼びするには御主人様を旦那様と云ふのだ。奥様はお部屋様とか奥様とか云つてよい。さうして御老人は御隠居様とか、大旦那様とか申上るのだよ。男のお子様なれば坊様、女のお子はお嬢様、或は坊ちやま、お嬢さまなど云つたらよい。二人以上の時は大きな坊ちやま、小さいお嬢様と云ふのだ。そして自分の事は私と云ひ、【ウチ】だとか、【アテ】だとか、【ワタシ】などは見つともないから云はぬがいい。さうして受け答へは【ヘエ】なんと云つてはいけない、【ハイ】と云ふのだよ。朝起きたらお上へ御挨拶をするのに「お早うゴザいます」と云ひ、晩は「お寝み遊ばせ」、外出の時には「行つて参ります」、自分の用事で外出する時は「一寸やつて頂きます」と云ふのだ。帰宅の時は「唯今帰りました」、御飯の時は「頂きます」とか、「頂戴致します」とか云ふのだ。そして旦那様の外出の時は「行つていらつしやいませ」、お帰りになつた時には「お帰り遊ばしませ」と、かう叮嚀に云ふのだよ。総て言葉使はハツキリと叮嚀にさうして柔しみのあるやうに注意するのだ。使に往つて来たら、必ず直様復命しなくてはならない。後から序に申上ますと云ふやうな懶惰事をやつて居ると何時の間にか肝腎の用を忘れて仕舞ふからなア』

お民『何とまア此処の内の男衆は俄旦那様を初め、誰人も彼れも女みたやうな事を云ふ人が集つたものだ、オホホホホ、これで私も大分に勉強を致しました』

薬用、秋の七草

霊界物語の第７１巻　第２章　「生臭坊」には秋の七草である萩に葛にススキ、撫子、女郎花、桔梗、藤袴にそれぞれ漢方の薬効があると記されている。

『モシモシ電信棒さま、この山道は昔から有名な腥草の名所で、秋になると随分楽しい旅が出来ますよ。泥棒稼ぎを行つてゐたわれわれ同類も、この辺を通過する時には、優美なデリケートななま臭の咲き匂ふ花を見て、悪徒が善人に墜落したやうな心持ちになりましたよ』

『そりや何ンといふ脱線振りだ。俺の名は電信棒ぢやない、天帝の化身天来の救世主天真坊と申すのだ。天帝の天の一字と玄真坊の真の一字を取つて天真坊といふのだ。そして今お前は腥臭が咲き匂ふ山道だと言つたが、それもまた脱線だよ。七草というて、秋の日の景色を添へたり種々の薬品になる重宝な草花だ』

『天真坊さま、コンナ山道に生へる草花が薬になるとおつしやつたが、一体全体何の病に利きますかい。惚れ薬にでもなりませぬかな』

『七草と言へば、萩に葛に尾花《ススキ》に撫子に女郎花に桔梗に藤袴、これで七種ある、それゆゑ七草といふのだ。秋の山野といふものは極めて詩的なもので、そぞろに哀愁の念を感ずるものだ。釣瓶落としに暮れて行く夕日を浴びた路傍の草花は淋しき秋の名残りとし、人の心を傷ましめ且つ慰むるものだ。薬用植物としても中々の効力があるものだ』

『萩は何の薬になりますか』

『萩は秋の七草の書出しで、莢果植物亜属の胡蝶花科で、一名荳科植物の一種だ。この葉を摘んで日光で乾かし茶の代用品とするのだ。あまり興奮もせないので子供や老人の飲料には極めて理想的だ。お前のやうな青春の血に燃えてゐる性悪男子は、平素情慾鎮圧薬として、毎日服用したが可からうよ、アハハハハ』

『天真さま、あなたチツと服用されたら如何ですか。眼の色が血走つてゐますよ、イヒヒヒヒ。それから葛の効能を教へて下さいな』

『又しても葛々と訳もない質問を発する奴ぢやなア。アタ邪魔くさい、しかしながら天帝の化身ともいふべき天真坊さまが、七草ぐらゐの説明が出来ぬと思はれちや、神の威厳にも関する大問題だから、チツとばかり解明の労をとつてやらうかい、アーン』

『葛の解釈ぐらゐにサウ前置詞が多いのでは実に閉口ですワイ。しかしながら後学のために大切な耳を暫時貸しませうかい』

『アハハハハずゐぶん負惜しみの強い野郎だなア。そもそも葛は萩と同じく荳科植物の一種で、昔から葛根といつて盛んに漢方医の山井養仙などに使用されて来たものだ。発汗剤、下熱剤として使用したり、胃腸の粘滑剤として使用し、または諸薬の配剤として調法なものだ。葛は葛根より搾取したもので最上等の澱粉だ。色々の料理や、夏季における汗打粉としての材料となる。それだから美人には無くてならない好植物だ』

『又しても美人が引合ひに出ましたな。一層のこと葛を澱粉に製造して、ダリヤ姫女帝の土産物となし、その歓心を買つたら如何でせう。これが女帝の心を動かす唯一無二の秘策でせう、エヘヘヘヘ』

『クヅクヅ言ふな。サアこれから一ツいやらしい奴を説明してやらう。幽霊に因縁の深い尾花だ。……幽霊の正体見たり枯尾花……といつて随分ゾツとする代物だ。直ちに石塔の裏を思ひ出す奴だ、アハハハハ』

『エエ天真さま、モウ止めて下さい。こんな山道で気分が悪いぢやありませぬか。ヒユードロドロと化けて出られ

ちや堪りませぬわ。モツと真面目に言つて下さいな』

『ヨシヨシ俺もあまり心持ちが良くないのだ。尾花は禾本科植物で、こいつの穂を集め、日光で乾燥すると立派な綿のやうなものが出来る。この綿は軽い擦過傷や、切傷の口にふりかけると血止め薬になる。夜具にでも使用すると軽くて暖かくて大変に工合の良いものだ』

『ダリヤ姫さまとの結婚式に御使用になるお考へですか、エヘヘヘヘ』

『エエ一ツ一ツ何とか彼とかいつてダリヤ姫に喰付けやうと致すのだなア』

『ヘンお気に入りませぬかな、それよりもモツとモツと優美な撫子の説明をして下はいな。ちよつと撫子なんて乙な名前でせう』

『エヘン、撫子は石竹科の一種で、日光に全草を乾燥させ、一日に四五匁《15〜19g》ばかりを煎じて利尿剤となし、第一腎臓病、脚気、水腫なぞの他の難病に用ゆると特効が顕はれるものだ』

『いやはや感心々々、大いに感心いたしました。今度は最も粋な名の付いた女郎花の効能の説明を願ひます』

『女郎花は茜草植物亜属の敗醤科の一種で、その根を秋季に採取し水によく洗ひ、日光に乾かして貯はへておき、用に臨んで一日に四五匁ばかりを煎じて服用と、婦人の血の道の順血薬として特効ありといふことだ。婦人に趣味を持つ男子は、如何しても女郎花ばかりは気をつけて平素から用意しておくべきものだ、アハハハハ』

『エヘヘヘヘさすがは女殺しの後家欺しの天真坊さま、何事にも抜目はありませぬな。ますますこのコブライ奴感珍いたしましたわい。サアこれから桔梗の効能を説明していただきませう』

『桔梗は桔梗科の植物で、その根を秋季に掘り日光に乾燥したものを桔梗根といふ。風邪の時、鎮咳去痰薬として用ゆると効がある。一日に四五匁を水に煎じて飲むと良い、エヘン。血液を溶解するサボニンが含まれてゐるのだ。その根から近時フストールやエバニンといふ新薬が製造されるのだ。ついでに藤袴も説明しておくが、これは菊科植物の一種で、この葉を日光に乾燥して煎じて飲めば、撫子と同じく利尿剤として効能があるのだ。貴様のやうな麻病の問屋さまは秋が来たら忘れずに採取しておくが可からうよ、アハハハハ』

△萩：葉を摘んで日光で乾かし、茶の代用　　効能：欲情鎮圧薬

△葛：葛根より搾取。最上級の澱粉。料理や汗打粉

△尾花（すすき）：穂を集め日光で乾燥（綿にする）
効能：軽い擦過傷や、切り傷に振りかける血止薬。夜具に使用すると軽くて暖かい。

△撫子：日光に全草を乾燥。　1日15〜19ｇを煎じて飲む
効能：利尿剤、腎臓病、脚気、水腫れによく、特に難病に効く。

△女郎花：根を秋に採取清水で洗い、日光に乾かし貯蔵。1日15〜19ｇを煎じて飲む。
効能：婦人の血の道の順血薬

△桔梗：根を秋に掘り日光に乾燥（桔梗根）　1日15〜19ｇを水に煎じて飲む。
効能：咳止め薬、痰切り。フストールシロップは今も売っている。

△藤袴：葉を日光に乾燥させ煎じて飲む。　効能：利尿剤（撫子と同じ）

七草（ななくさ）は、人日の節句（1月7日）の朝に、7種の野菜が入った粥を食べる風習のこと。元々の「七草」は秋の七草を指し、小正月1月15日のものは「七種」と書く。この七種も「ななくさ」と読み、一般には7日正

月のものを七草と書くなど、現在では元々の意味がわからなくなり、風習だけが形式として残った。これらの事から、人日の風習と小正月の風習が混ざり、1月7日に「七草粥」が食べられるようになったと考えられる。

【春】　「春の七種(くさ)粥」 1月7日

【秋】　「秋の七草 」

萩(はぎ)

女郎花(おみなえし)

葛(くず)

桔梗(ききょう)・朝貌(あさがお)

尾花(おばな)・薄(すすき)

藤袴(ふじばかま)

撫子(なでしこ)

「 秋の野に　咲きたる花を　指折(およびおり)り
　　かき数ふれば　七種の花」
「 萩の花　尾花葛花　撫子の花
　　女郎花　また藤袴　朝貌(あさがお)の花」
　　（ 万葉集　山上憶良）

秋の七草

参考までに（インターネットより）

春の七草は，食用野草が中心となっています。

緑の乏しい寒い時期にこの七草を粥にして正月七日に食べ，邪気を払い縁起を祝うという慣わしがあり，年中行事の一つになっています。でも，利用する七草は地方によって同じではないようです。

特に雪国では，野生の植物を摘むことがむずかしいので野菜が用いられることが多いということです。 芹(せり)、薺(なずな)（ペンペン草）、御形(ごぎょう)（母子草(ははこぐさ)）、はこべら（はこべ）、仏の座、菘(すずな)（蕪(かぶ)）、すずしろ（大根）の七種類の野草・野菜のことです。

それぞれの野草、野菜の効果効能を記します。

＊芹 ―　ビタミンＡ・Ｂ２が特に多く、カルシウム・鉄分も多量に含むため、貧血症に有効です。繊維質にも富み、健胃や整腸に役立ちます。

＊薺 ―　早春の若菜を食します。たんぱく質が多く、ビタミンＡ・Ｂ・Ｂ２、カルシウム、鉄、マンガンといったミネ ラルが豊富で、貧血に効果的です。血圧を下げる作用もあって、高血圧の予防にもなります。利尿、便秘の解消、生理不順にも効き目があります。

＊御形 ―　たんぱく質・ミネラルに富み、少量ながら脂肪分もあります。痰切りの効果があり、気管支炎・扁桃炎・風邪の予防に効き目があります。

＊はこべら ―　若い茎葉を食します。盲腸炎や歯槽膿に効果があり、催乳作用もあります。たんぱく質や鉄分に富み、体液を弱アルカリ性にする作用があります。

＊仏の座 ―　健胃・整腸の効果があります。

＊菘・すずしろ ―　食べものの消化を助けるとともに、免疫力を高め、体の酸化を防ぐアブラナ科特有の成分を多く含む。